明治二十一年三月十日發兌

いらつめ

第九號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつゑ第七號第八號目次

いらつめ。　新年を祝そ。
姫かゞみ。　ふくさづゝみ第四回。まゐがれつと第二回の下。原かね子傳。
家政要錄。　西洋婦人家内の實况。小兒の育て方。清潔方。保健食料。
講　　義。　美術の話。
文藝美術。　和文を學ぶ捷徑。新形の花かんざし。婦人の手紙認樣。唱歌。(初春の湖。はるのあけぼの。新年。)
學　　藝。　食鹽の效用。最も湯の出易き急須。樹木を見て地質を識る。
叢　　話。　仇を恩。裏店の女房。
批　　評。　詩人の春。肺病養生法。西洋女大學。戰場の花。
月　　報。　數　件
色刷附錄。　新年歌音譜付
いらつめ。　婦人と新聞紙。
姫かゞみ。　ふくさづゝみ第五回。まァがれッと第三回。
講　　義。　美術の話(前號の續)。
文藝美術。　樂典初步。唱歌(新年の唱歌。花鳥。春の遠山。武藏野の山吹。下總なる藤澤村を過ぎて)新形の封袋。繪畫。
學　　藝。　炭薪を儉約する法。
叢　　話。　鼠れとし。
批　　評。　交際の栞(シオリ)。女子教育新論。俠美人。
家政要論。　注意の價値。
月　　報。　數件
通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏口述。

いらつめ第九號目次

社　　說。　膝とも談合。
小　　說。　空行く月第一回。
家政要錄。　小供育て方(其二)。室内の裝飾。
文藝美術。　樂典初步。唱歌。溝渠の歌。夜光の珠。下總なる藤澤寺を過ぎて。歌。(花二十五首。外四首)。新工風髮飾。日本古代男女裝束。
學　　藝。　蟲の話…蚤。
叢　　話。　酒井忠直の夫人。團欒の餘波。現時物語婿引の卷(襖越の品定)。
批　　評。　學海居士里見八犬傳の批評の批評。
講　　義。　用器畫法稽古の仕方。
餘　　與。　幽靈をあらそそ新法。
月　　報。　十二件
附錄の畧譜表。
通俗衛生學。　醫學士竹中成憲氏講述。
附　　錄。　競漕の歌。上眞行氏作

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第九號

いらつゑ

膝とも談合

諺にも云ふ膝とも談合とは良人が百方思慮を費し謀窮まり術盡きて後始めて細君の助言を聽くときの套言なり。其意を推すに蓋し婦人なるものは元來思慮も無く分別も無し偶々有之も所謂女の猿利口にして却て其身に害あるも毫も益する所無きが故に假令助言と婦人に求むるも到底無益の勞に過ぎずと雖ども諺にも云ふ三人集まれば文珠の智恵にて千慮の一得如何なる明案の婦人の腹より出でんも圖られず、若かず一たび之に諮りて以て斷念の地をなさんには謂ふに過ぎず。嗚呼此諺にして日本小說家の紋切形に過ぎざれば則ち可なりと雖ども若し之をして日本夫妻の關係の實況を穿ち得たるものならしめば余儕は只流涕長大息の外無きのみ。

夫れ夫妻の間に最も貴重なるものは只一片の愛情に非ずや。愛情に最も貴ぶ所のものは能く相互の衷情と了知し喜憂と共にし哀樂と共にするに非ずや。良人若しくは細君の身上に振り懸りたる心配は己れ恰も自から其局に當るが如く其心中に享有る所の快樂は己れ恰も自から之を享有るが如く憂ふ可きは共に之を憂ひて之を除くの方法を考へ喜ぶ可きは共に之を喜んで之を永遠に保つ道と計る。是即ち眞正の愛情なり夫妻の眞面目なり。從來日本家內の實況と察するに往往之に異なり夫は夫、妻は妻、彼は宜しく其好む所を爲すべし、我は則ち我が好む所に從はん、我が爲す所彼如何んぞ其是非を知らんや、喜も之を共にせず憂も之を共にせず謀盡策窮て後之を細君に告ぐるは從來我邦夫妻の常態なり。嗚呼膝とも談合とは小說家の紋切形に非ず不幸にも我邦夫妻の關係を穿ち得たるものと謂はざるを得ざるなり。

且つ夫れ婦人の職務は其目固より多しと雖ども就中最も重要なる者は夫を扶け夫の相談相手と爲るに在り。食物料理の事固より大切ならずと云ふに非ず、衣服裁縫の事固より緊要ならずと云ふに非ず、衣食の外百般の事物固より貴重ならずと云ふに非ざれども是等は多くは有形の事物にして其困難も割合に少なく不完全ながらも他人に命じて之を爲さしむるを得可しと雖も夫の相談相手となるに至ては其他の無形に屬する職務と同じく最も困難にして亦た最も緊要なる本務とす。夫れ人は往々一己にて獨斷し能はざるとあり假令獨斷し得る

も其斷定を下すに躊躇あり。此時に當て他人の助言を受くれば往々翻然として悟り斷然として決するを得れども人には亦皆夫々心中の秘事ありて濫りに他人の助言を得る能はざる場合なしとせず。此場合に於て能く心中の秘密を開きて其說を聞き其助言を求めて毫も忌む所無きものは內人なりとす。內人に對しては秘密も無く嫌忌も無し、心中の眞髓を開きて之を明示して之が助言を求むるは實に良人の義務なりと謂ふも可なり。從來我國の有樣を見るに互に胸臆を開て相談し衷心を示して相語るか如きは普通夫妻の間の常態に非ず。進退維谷まりて而して後始めて所謂膝とも談合するは尋常一般の狀態なりとす。余儕は實に流涕長大息に堪へざるなり。

然れども今日此の如きの狀態に陷りたるは固より偶然に非ず。良人か通常細君の助言を求めさるに至りたるは決して故なくして然るに非さるなり。蓋し從來我邦の婦人は通常學問も無く智識も少なく且つ世間の事情にも通せず。半生を過ぐるも猶深窓の阿嬢と異ならさる者あり。是を以て假令婦人の助言を求むるも婦人は實際の境界を解する能はず又其境界に處するの方案を授くる能はざるが故に男子も亦其助言を求むるを以て無要の勞に過きすとするに至れり。果して然らバ今日靈智靈能を有するの婦人にして智能を備へざる身体の一部と比較せらるゝに至りたるも夫れ將た罪を何人に歸せんや。近來婦人の敎育大に其歩を進め今日の婦人は復昔日の婦人に非ず。今日の婦人は學問をも備へ智識をも備ふるの婦人なるか故に夫妻の間係に至ても亦全く昔日の觀を一變せるは蓋し必然なりと雖とも學醫必すしも名醫に非す高等の敎育を受け高尚なる理想を養成したるの結果ハ或ハ普通日常の事物に闘する思想を減却し世間の事情に疎からしむるか如きとあらば到底家內の舊觀を一變するの目的を達する能はさるなり。余儕ハ切に望む今日高等の敎育を受くるの淑女か日常瑣末の事物を屑しとせさると無く能く世間の事情に注意して其高尙き思想と該博き學問とを利用し膝とも談合の俚諺をして復た實際を穿ちたるの語に非す單に小說家の套言たるに過ぎざらしめんことを。

小說

空行く月

美妙齋主人

第一回　では梅と鶯とが末の春を契ります。

何某の大臣は鹽竈の浦の景色を庭に作らせて樂しみました

とう。是も其類の人の持物でしやう、庭は一面すべて濱邊の躰で、直前の袖ヶ浦の潮水を堰入れた瓢形の入江の岸には黒松や磯馴松か我儘に曲りくねり、潮に蒸されるさめ蜂窠の化石のやうになッた岩石が其間にうづくまッて居たり、寢て居たり、地は大抵貝殻の被衣を被り垣は殘らず海苔寄の麁朶で、その横の方には鹽燒小屋の見本かと思はれる藁葺の亭があります。貝殻の被衣を引けて顔を出して居るのは芝生の築山で、其麓に行列を揃へて居るのは菫菜です。築山の上にも羞を含んで俯向いて居る紅顔の薔薇もありまそ。薔薇の側には奥床しい姿で立ッて居る麗質の木蓮もあります。芳香も隠なく四方に充ちて、姉顔の鹽風に追捲くられも爲ません。

此廣庭、否、猶持主の機嫌を取ッて言へばこの濱邊のもるう那方にある建物も全で光る君が須磨の浦曲に居た時住んだ館の名殘とも思しく、その作方の古風な事、白木の高欄に杉柾の妻戸をあしらッてあるのはまだしも、而も半蔀の横には萌黄匂、薄綾の縁のある簾が眞紅の厚流蘇とゝもに垂れて居る庵梅はそれを見る人をして如何にも源氏の世に生出さやうな心持を起させる程で、猶其上にも景物を添へれば、この蔀の影の邊から折々は笙の音や箏の琴の調が仄めくをさへあります。

此主人は何樣な人でしやう。嘸ひねッた人でしやう。あまり拈過ぎて終には家をも拈潰すやうな間違も無いかとも夫婦喧嘩に匙を投げる吝の字の目算で、「ひねりし甲斐の無くもあらじを」とも古今集の紙子に身を窶す敷島屋の主人の判斷です。

その建物から連立ッて何か話しながら濱邊の方に來ますのも二人の小供で他目にも兄妹と見えます。一人も男子で年齡は十六ぐらゐ、假に側の物で比へれば其顔容は木蓮とも言ふべき体で氣高い中に何處と無く愛らしさの香が籠もッて居ます。身体は些痩せて居ますが、その代に發育の度が思遣られて頼母しいです。身形は洋服ではありません。栗梅の小袖に樺茶嘉平次平の袴を高く着け、黒と鼠と交ッた色の長靴下に編上の深靴を穿いて居ます。その品の好さ…人に因ッては澁いとも言ひましやう…けれど些しも見飽がしません。

一人は女子で十三ぐらゐ、是をも側の物で比へれば殆薔薇とも言ふべき体で、色艶の美くしさ、眼鼻立の麗はしさ、とても筆には書盡くされません。身体は小さい方です。あどけなさは年齡に似合はぬほどです。けれど心は鈍くはありません。顆松葉に壺(二)のあしらひのある曙染を衣て、燃立つ樣な猩々緋に白の牡丹を金糸の縁取て縫上げた帶をやの字に志め、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

麻裏天鵞絨鼻緒の草履を穿て居ます。

「どれ休まうか」と言ひながら男の子が岩石へ腰を掛けると女の子も爭はず直ぐ側の石へ腰を掛けます。男の子は沖を眺め、

「あゝ宜い心持だ、この潮風に吹かれると。この浪の勇ましさ、沖の廣さ、どうも人の氣を引立てるねェ」。

女の子は眼には何うしたことか、愁の水が些しさしぐんで居ます。

「え、阿輝ちやん、何よりも海が一番立派だねェ。浪の靜かな處では如何にも滑な船を滑らせ、浪の暴い處では見る間に高まらや山をもこしらへるのだねェ。あゝ海軍の士官はいゝなァ」。

論法の不完全、實に是が小供の常です。女の子は爪際のサヽクレを撮みながら

「あの本當に、それでも、明後日あの軍艦に乘込むの」。

「あゝ。明後日からは私も海軍の兵卒さ。好いだらう」。

「だからそれがさァ……」

「なぜ。御前も好いと言ッたでも無いか」。

「けれど明後日でも……」

「明後日でも惡るいのかね。何時なら好のだね、それでも」。

「何時ッて事は無いけれど」。

男の子は思はず莞爾と笑を含みます。

「そら、また初まッた、分解らず屋が。『何時ッて事は無いけれど』……阿輝ちやん、よく御聞きよ。海軍の士官は宜いよ。日本は海軍の國だァね。だから私も海軍の士官に爲らうと思ッて……それで今日叔父さん(阿輝の父)が送別をしてくれるといふのだァね。私だとて御前と始終一途に居たいが、まさ人間は一度は苦辛をして見ないではいけないと言ふ事だから、それで海軍へ加はる志願をして……そして宜いよ、海軍の士官は、阿輝ちやん……ね、遠洋航海で珍らしい處を見たり、水泳を爲たり、競漕を爲たり、音樂を聞いたり、水豹の獵を爲たり……あ、御前北極旅行を讀んだらう、あの北極で色々な目に遇ふ話の北極旅行を」。

話はいつしか本を忘れて岐路へ進んで行きます。此間女の子は菫栞を挘ッては泉水の中へ惡戯に投込んで居ましたが、此處ですこし上を向きます。

「あゝ左樣、左樣、北極旅行……あの高田さんが下すッた……」

「左樣さ、そして高田さんを御覽、あのとほり立派になッて……

あの人は最う紐育へ四度も行ッたとさ」。
「紐育……あの亞米利加の。其處へも、兄さん、御前行くの」。
「行くともさ。歸途には御前に色々な土産を買ッて來て上げやう」。
「本當、え、兄さん、本當に。それでは御土産に、ねエ、あの白粉と香水と手玩具と鏡と、それからねエ、あの色摺の畫と……」
「大層あるね。宜いよ、宜いのを買ッて來やう」。
「あゝ、ね、有難う。海軍の士官、兄さん、宜いことよ」。
「あはゝ、御土産と聞いたら海軍の士官が好くなッたね」。

「あら、あんな事を……左樣ではないの」。
この答も甘たれた泣聲で、それでも斯う辯護するから妙です。雛鳥のおどけなさ、橫枝の花も其眼にはめづらしくて思はずそれにも心を奪はれ、向かうと思ッた方向をも更へます。前の心細さは暫らくの間「御土産」に追出されては居ましたが流石に先入は主となる常例、やがてまた殘惜しさが萌出ます。

そゞろに眼の中に催すなみだはむしろ舌よりも愁歎の情をよく言現して居ます。重さうな眼の方向はたゞ注いで居ます、男の子の靴の邊に。今は阿輝も泣聲で

「けれど妾は悲しくて…兄さん」。是ばかりで跡は出ません。此一句は流石男の子の胸にも釘であッて誰も促しはしませんがその眼にも亦…

「兄さんが居ないと妾は…」

一句一句はいよ〳〵断腸の種で、いよ〳〵悲い聲になります。

「さみしくて淋しくて…」

是で男の子もたまりかねて來ました。

「あゝ最う〳〵、阿輝ちやん、…左樣言はれると私も亦…けれど直だよ、直に歸ッて來るからさ。まアそんなに泣かずに…さアこの手拭で、宜いよ、御拭きよ、その涙を」。

「明後日からは斯う涙を拭いてくれる者も無く…御母さんに叱られても贔負してくれるものも無く…」

「あら何うそんな事を言はずに…ばア…乳母も居るわね。そら左樣言ふ乳母も來るよ。泣顔を見せないでさ」。

「そんな事を言ッたとて兄さんだとてそんなに涙を溜めて居て」。

「私は馬鹿だから堪忍して」。

此處へ乳母が呼びに來ましたので阿輝も仕方無く急に泣顔を隱し、三人連立ッて母屋へ行くと、はや送別の宴のはじまることと見えて來客も込合ふ樣子で笑罵る聲が聞えます。此日は此で暮れ、翌日も何や角やの準備で墓なく過ぎましたが、阿輝には過行く日が怨めしくてたまりません。出來る事なら時計の針を跡へ戻して日を延ばさせたいと思ひます。出來る事なら平相國の娘にもなりたいと思ひます。愈今日の午后一時に船は出帆するとあると其朝來る新聞紙の日附までが憎いやうで、その日附さへ疑はしいと思はれる程です。他に物を言はれても返答が容易に出ません。船へ乘ッて行く人の外は皆憎らしく思はれます。昨日一昨日ごろ迄は今日の事を想像して辛く思ッて居ましたが、今日になッて見ると其辛く思はれた日が却ッてなつかしい樣です。「うしと見しよぞ今は戀しき」。實にそれに違ありません。

阿輝と交情の好い男の子が乘込む軍艦は（假に名を付けますが）十六夜といふ號で、速力では有名な物です。毎でも大概品川灣に碇泊して居ますので此時も亦其處から出帆するのです。今までは男の子も阿輝と一途に濱邊からそれを見て居ましたが今は志願も叶ッて乘込む許可を得て愈今日其へ移るとなれば流石に言ふに言はれぬ嬉しさが心の内に無くはあり

ません。その代にまた言ふに言はれぬ悲しさも折々出沒して嬉しさと心の田地を爭ッて居なくはありません。

男の子にはつれなん樣な時計が十二時を打ちます。阿輝には全くつれない小舟が交情の好い人を無情にも乘せます。起りますのは「御嫌機よろしう」の聲々。微に洩れますのは涙を吞む忍音。あゝ涙を蹴て行く小舟…たゞコガレコガレて行きます。

實に見て居るものも涙が出るほどの有樣でした、船が今出帆しやうとする時濱邊の建物の二階の窓から手拭がちらちらして居たには。此二人の中の愛情は是程かと思ふと側に居る人々も思はず身を戰はせて坐に齒根に力を入れます。實に天下に愛情の種類は多くても此二人の愛情ほど純粹な物はありません。二人の心の中には只、一片、目にも見られぬ、口にも言はれぬ、溫柔の痕より外は更に無く、今はたゞ高尚な、その勢に驅役はれて二人とも憂苦の奴僕となッて居るのです。

家政要錄

小供の育て方　其二

育兒法は竹中先生の衞生學の御講義中に詳しく述べられます筈ですから私が書き立てるも無駄だと思ひまして八號には出しませんでしたが育兒法の處迄はまだ御間もありますから此號から又御話し致ます。さて小供はとかく死やすく至てもろき者で五歳になる迄はまことに油斷はなりません。信ずべき統計で見ますと百人の死人中、二十五人は一歳の小供、十六人は一歳より五歳までの小供にて、つまり百人の死人中四十一人は五歳迄の小供です。かく澤山死ぬのは親の不注意より充分の手當をせぬからで金持でも貧乏人でも此點では同じとです。

小供の死ぬ源因は時候の變化にまけると養生のよからぬからです。母の胎内は攝氏三十八度位で至極溫です、その溫な所からヤット十五度位な冷こい所に生れ出るのですから怯弱な者はたまりません所へ時候はいぢ惡く始終變化しますから稟性弱い者が死ぬのです。

かやうな小供はどうするともできませんが、この變化にかちて生き殘たものが死ぬのは親がわるいからです。なぜと云へば小供の死ぬのは消化機(胃腸)病と呼吸機(咽喉及び氣管支)病ですが、こんな病氣は親たちが注意すればかゝりません。やたらに乳を飲ませたり食物をやつたり腐敗た乳をのま

せたり不消化物をやりますのが消化機病の基となるのです。小供ハ頑是なく何のけじめもありませんから喜んで無暗よ飲だり食たりします。無暗に食べますから胃や腸は無暗に働らかんければならぬから是非よわります、腐敗た者や不消化物を食ますから胃や腸は消化することができません。一體胃と腸が達者で働らくから食物が消化して血が出來るのです。然るにこの大切な道具がわるくなるから食物は消化れずに腐敗て其儘、上下から出てしまつて血ハ出來ません。血ができませんから小供は始終ひもじく始終食べたがりて食べます、けれども消化れぬから胃腸は益々わるくなり、血ハ益々へります。減るから段々やせて顔ハ老人の如くになり皮膚ハ皺だらけになり油氣はなくなります。さて斯うなると心臓の機能が衰へる。心臓が達者で始終どきん／＼と働くから血が全身に廻て人が生活てゐるのですが心臓がよわると血を全身に配布る力がなくなるから段々青ざめてきます。これで死ぬ下地ハ充分出來てゐますから何病と限ては申されませんが一種の病氣に罹つて無慘や人世の快樂を味ふの暇もなく彼世の人となりはてます、これとても親が注意さへすればかうはなりません。さてかうなる前に心づいて食物を加減しますと死ぬ迄にはなりませんが、筋骨の營養が不足したのですから發育が遲く歩行を初めるのも智惠のつくのも遲くなります。以上申上たのは食物から起る消化機病でそがまだ氣管支病と云ふ恐るべき病氣があります。小供の身體や衣服をむさくるしくしてれいたり又は小供は風の子なとゝて薄着なとさすると風邪をひきます。これが氣管支病の基で百日咳を起したり熱病になッたり咽喉が腫れたりして死ます。

さていかにして是等の病氣を去るかと云ふに消化機病を避けるにハ時を定めて食物を與へるとが肝心です。乳呑兒に泣たからとてのべつに乳を與へるのは消化機を害ふからよろしくない。中にハ「それハよいで厶ましやうがとても出來ない相談です」と云ふ方もありますが、此の慣習をつけるのは造作もないとにて乳附ける時から時刻を定めてその時より外にハ決して與へなければ自然つきます、現に西洋でやつてゐますから何よりの證據です。泣くのハ乳を呑たいからばかりでハありません、ほかにも種々な泣く源因があります。小供ハ口がさけませんから乳を哺みたいにも身躰が痒いにも小便がしたいにも腹が痛むにも皆泣て報らせます。ですから泣けば乳と思ふハ大層な勘辨違です。かく云ふと「記者さやう御云ひ

でも泣くのがとまるから不思議です」と云ふ方もありますがそれは其筈で淑女方でも御腹のいたむときは大層面白い事があれば痛いのは暫時は御忘れになります、子供だとて同じとにて何より好物な乳にありつきますから大概な事ならがまんします。なにしろ泣くのは乳がのみたいばかりではありません。ですから御小供衆の爲になりますから時を定めて乳をおあげなさるが宜しい。まづ生み月から三月迄は三時間ごと三月以後は一日に五回で澤山です。時を定めて與へるとは乳を呑まぬ小供でも同じ樣に必要です。序でにいつ乳を廢めてよいかを御話し申ましやう。別に一定の時はありません、自然の法から見れば齒のはへる時には廢てよいはづですけれども齒のはへるに一定の時はありませんから何歳何ヶ月になれば乳を離してよいとはちと申かねますが。なにしろ乳を廢めるときは廢める前から折々粥を與へ或は柔な卵を與へ漸々肉類野菜を與へていつとなく乳をやめるがよろしい、急にうつらすると胃病になります。さて小供に與ふる食物はすべてかろくしてこなれよきからだの養となるものを與へ、食べるにはゆる〳〵と喰はしたきものです。小供はとかく丸のみにするものゆゑよく嚙みて食べる樣敎へなくてはいけません、さなくば胃弱になります。

氣管支病の源因の主な者は風邪です。風邪の源因は衛生學の中にありますから御覽なさい。其の次は襟卷にて、年中卷て居ればよいのですが卷たり取たりしますから直に咽喉が風邪をひきます。其次は口で呼吸するのですが、なぜ惡かはいらつめ第四號肺病の話を見ればわかりませう。なにしろ氣管支病を避るには體に垢をためず、薄衣せず、急に體を冷さず、襟卷を用ず、鼻で息をする癖をつけ、又七號の淸潔法に說ける如く毎日冷水浴か少くも胸部を濡手拭にて拭ひなさい。總て物事は習慣ですから世話する御方も世話される者も互に癖つきてなさねば心がすまぬやうになりますから初は御面倒でも小供衆の死ぬのが御嫌なら實施なさい。まだ此外に死ぬ源因がありますが十號で段々申上ます。

室内の裝飾

森羅萬象の起居動作悉く皆禮儀に依らざる可からず。禮節ある擧動は至ッて優美に見ゆるも儀式なき起居ほど醜惡なるは無きぞかし。寔とに一擧手一投足の微細なる行爲にも心をべき事あり。「衣食足ッて而して禮節を知る」と唐人も云ひし

が、夫々銘々其身に相應しき禮儀はあるものなり。さるからに「禮節は習慣の學問なり」とも云へり殊に女性の身にしありては、男子に勝りて、いやが上にも禮儀作法に深く心を留む可きは、今更申述ぶるにも及ばぬ事なり。

我國にても古昔より淑女に禮儀作法を敎ゆる事のいと深切にて、禮儀に關わる書籍抔も其數いと多く出でゝ禮儀作法の整然たるは、西洋諸國にもをさ〳〵立ち優れて、日本固有の禮儀の優美にして高尙なるは、中々他國に比ひ稀なりと云ふも可ならん。然はあれども室内の裝飾殊に客室の裝飾にありては未だ深く敎え導かざる如し。我儕が淑女達へ初見參の引手物に、チトばかり室内裝飾の事を申述んも、強に益なき事にもあらざるべく思はるゝなり。

我國の如く古來より餘りに交際を重んせず、往來の頻繁からざる國柄にありては、室内裝飾の事項を諸般の禮儀中より取除きしは寔とに理なきにはあらず。此裝飾の禮に附きて重きを置かざりしも宜なりと云ふ可し。西洋諸國にては室内裝飾の事のみに關りて大部の書籍さへある程なり。然はあれど此等の書籍に記載せし事項、西洋には適ひもせん。今假に我國に應用し得さるものまた極めて勘なからず。其我國に應用して善きと考へしものゝ二三を茲に記し侍らん。

我國にては兎角室内の諸物を戸棚押入納戸へ仕舞込むの風あり。少し何か室内へ並べ置く時は直に取散すとて室内の美觀を添へ得べき物品さへ空しく棚の内へ籠城隱居せしむ、無慙の事なり。物品を室内へ打列べたりとて其陳列裝飾の法さへ整ひなばなど取散らすとの責を受くる事のあらん。室内を取散らすと云はるゝも其陳列裝飾の惡しき故なり。室内殊に客室の如き處は務めて珍品奇物を陳列し、歷史上履歷のある物品は殊に其室内へ列べ置く可し。先祖秘藏の珍器を來客に披露して至極妙ならん。軍功に依て拜領せし玉杯列べて最も甲斐あらん。人の來訪せし時見てもて限り無き語り草ともなりなん。詠めてもて言葉の蔓を得るよすがともなりなん。室内裝飾の整頓と不整頓とを見て其家政の整不整を占ふといへり。忽諸にすべからざるは室内の裝飾なり。室内の裝飾を美々しく裝飾するは淑女の務なり。

室内の裝飾をなすに簡便にして倔強の事あり。則ち草木をもて室内を裝飾る事なり。古昔より我國にても生花或は盆栽を床の飾となすことあり。今後は日本風の家屋は申迄もなく西洋風の家屋にても明窓の下淨几の上此物を少くべからす草

木の裝飾は尤も時と場所を見計らひ加減をすべきものなり。此事に付きていふべきことさわなれバ號を追ひて述ぶることとせん。

文藝美術

樂典初步

夢の屋　りをる

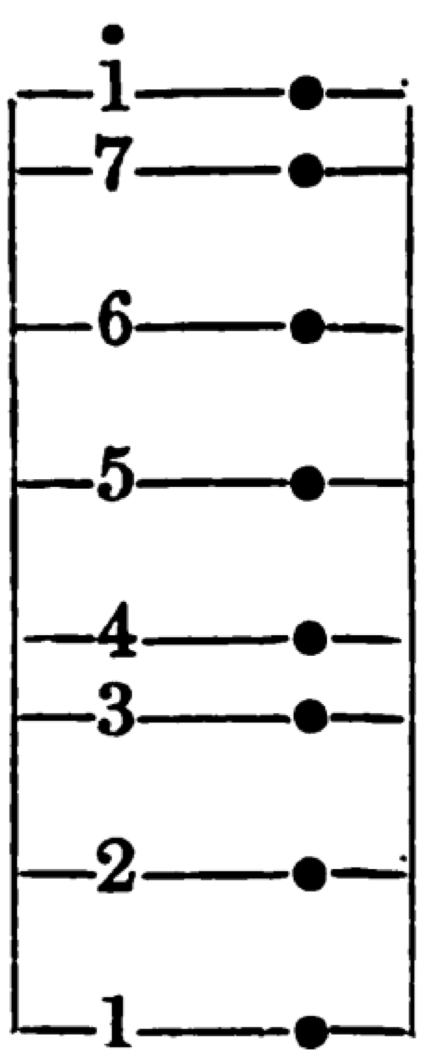
前號には略譜表の事を大畧述べ畢りましたから次は本譜表のお話に移る順序ですが、私ハ幾分か實地御練習の便宜を計りて述べたい考で御座りますから本譜表ハ暫く跡回しとして先づ音樂の基礎たる音階の事よりお話致します。

偖西洋の音階には全音階、半音階、四分音階等の種類が御座りますけれども音樂の基礎として用ゐるものはたゞ全音階の一種類に限ります。

全音階にハ長音階と稱するものと短音階と稱するものとの二種あります。シテ長音階ハ陽氣な音樂即ち勇壯活潑の樂曲に專ら用ゐ短音階ハ陰氣な樂音、即ち悲哀鬱憂の樂曲に專ら用ゐます。左れバ敎育上などに用ふる音樂ハ無論長音階的のものが適當で御座ります。

長音階は相互の間に多少親密の關係を有する八個音の繼續より成り立ちます。之を圖に作る時ハ即ち左の通で御座ります。

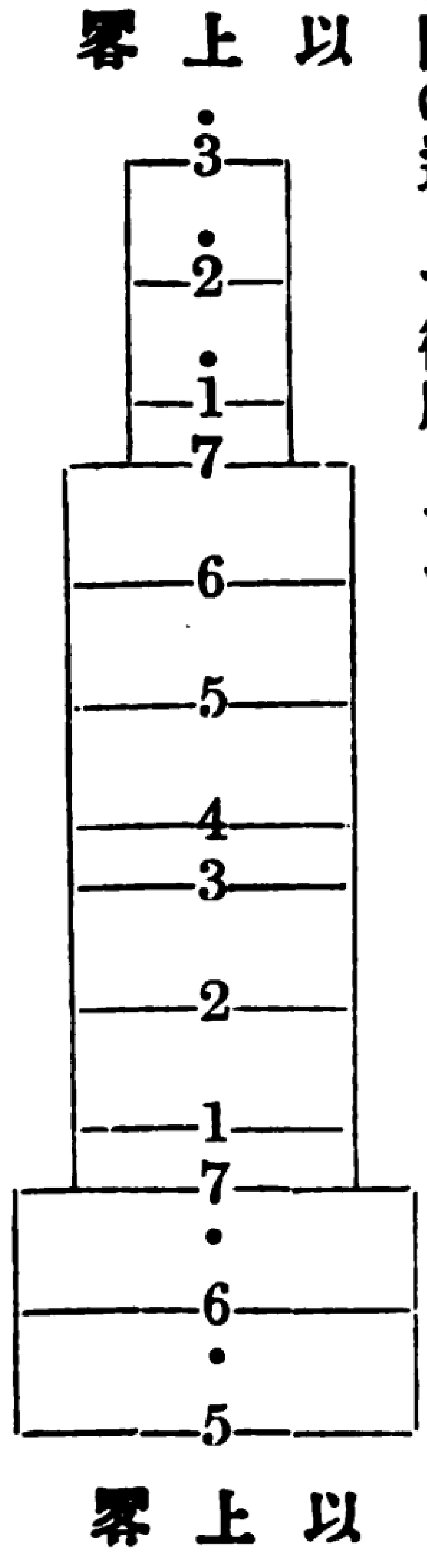
長音階



右を御覽になれば長音階にハ八階即ち八音を含める事が一目にお分りでしやう。シテ其各階上に附記したる數字は略譜表に用ひたる七個數字と同物にて其作用も亦た同一で御座ります。此數字を總括して階名と稱します。

音階の第八音(1)即ち第一音より數へて第八番目の音)は全く第一音の甲音即ち八音高き同音で御座りますから之を表するにハ亦た同階名なる(1)を用ゐます但し第一音と混淆の恐がありますから甲音にハ・(1)の如く其字頭に一點を附して彼此の區別を立てます。

偖音階ハ必用次第で前記音階の上若しくハ下に層々搆成す事があります。此場合に於ては上層音階の階名にハ總て字上に下層音階の階名にハ總て字上に一點を附記して區別する事左の圖の通りで御座ります。

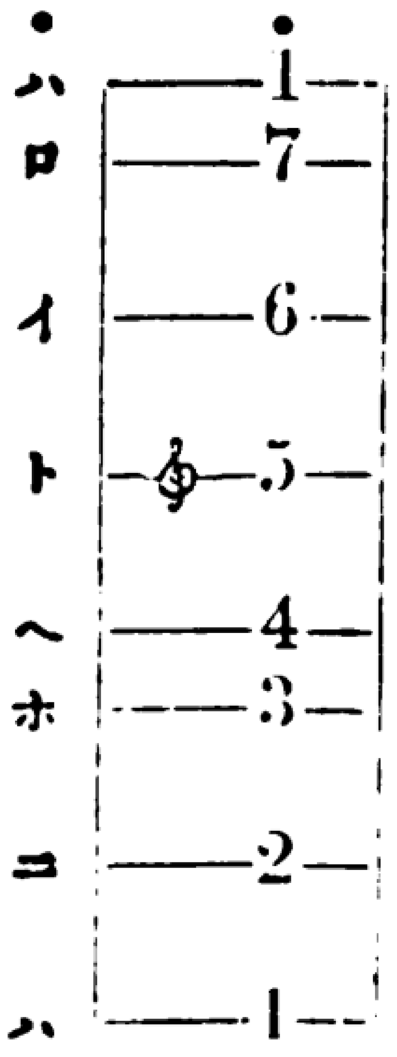


又上層音階の更に上層に、又ハ下層音階の更に下層に音階を層構するときには一層おとに階名の點數一個を增加します。偖又音階の階級に廣きところと狹きところとの二種ありまして如何にも不揃に見えますけれども音樂上の階梯ハ尋常の階梯と違ひ是非彼樣な形ハ構成致さねバなりません。蓋し音階ハ全音半音の二種より成る者にて長音階の八音ハ即ち全音二個、半音一個、全音三個、半音一個の繼續より成り立ちて居ますから全音の階ハ自然に廣く、半音の階ハ自然に狹き理で御座ります。さて全音と半音との區別ハ音階圖上に見まする時ハ眞に一目瞭然で何の困難もありませんが、實際音聲を發して其區別を正しく唱分けまするハ頗る困難であります。左れバ音階を御練習の方々ハ調子の精密に整ふた樂器即ち舶來の「オルガン」に據りて全音半音の區別を反復御熟習あらまほしく存じます。但し舶來の樂器ハ如何にも價が貴いから手元不如意の我輩にハ鳥渡手輕く購求る譯にハ參りかねます。さりとて音律の標準なしに無暗と練習致してハ害こそあれ、些の利益だも御座りませんから、是非律準たる者を備ねバなりません。ソコデ廉價で鳥渡重寶な律準が有升。それハ別段新奇の品でハありません、古往より我が音樂家が使用し來つた所謂律管で御座ります。律管ハ俗に調子笛と稱して雅樂又ハ箏曲等の調律上に使用するものにて三本若しくは六本の管に簧を施し之を吸ふて六律又は十二律を意の如くに發せしむるもので御座ります。シテ此等の律管は其儘西洋の音律に適用が出來ないではありませんが彼我音律の次序の相異、律名の相異等多少紛雜の嫌がありますから寧ろ「オルガン」音調の通りに新調して用ふるが餘程便利と考へます。此調子笛ハ東京下谷金杉村五十五番地に住する神田重助と申す樂器師へ御注文になれバ何時でも調進する筈で御座ります。

偖又音階ハ音樂の土臺でありますから十返よりハ百返、百返よりハ千返と成たけ多數に唱へて練習するほど其得力が大きくあります。シテ「ヒー」「フー」「ミー」等の階名ハ數の多少で音の高低を知ると云ふ最も重寶なものですから初學の方々ハ容易に之を廢止する事ハ出來ません。しかし立派に音階を唱ふる事が御出來の方ハ漸次に之を止めて ah ta 若しくハ ea 等の綴を換用ひ口を十分に開けて聲を大きく出だす事を主として御練習ありたく存じます。

扨説音階上にハ既に階名を記して其各階音の下より上に至るにつれて低き音より高き音に上進する事を示しましたがこれ

のみでは此音階は果して何調だと云ふ事はまだ少しも分りません。因りて一應音階上に調名を附記して御覧に入れましやう。調名は即ち調子の名にして、西洋にては概してa b c d e f gの七字を用ひまするを本邦ではいろはの首句の七文字(即ちいろはにほへと)に譯して用ゐて居ります。今之を音階上に配記するときは即ち左の通りで御座ります。



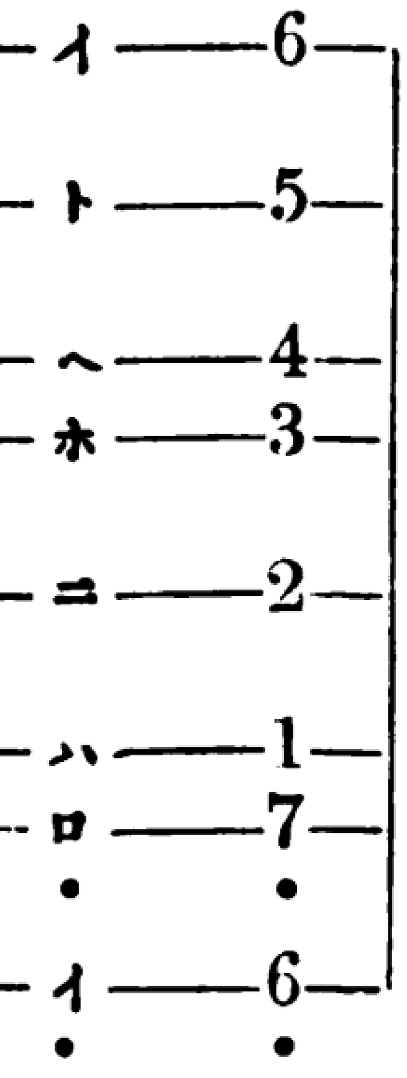
右を御覧の方は必然一個の御不審が起るでしやう。その御不審は外でありませぬ、音階の第一音即ち(1)に七文字の起初なる(イ)を配しないで中途半なる(ハ)を配したる一事です。抑も此等の七文字は孰れも(1)即ち主調音となりて一種の音階を構成し得るは勿論ですけれども此等の諸音階中にて其模範音階となるものは只(ハ)を主調音としたる音階に限ります。其故いろはの順序に拘らないで第一番に(ハ)の音階を構成したので御座ります。此音階は全音の多分且つ自然音より成り立ちて居りますから之を全音階的自然長音階と稱します。

又此音階の第五階に記載したる記號を樂鍵と稱します。此記號の作用は專ら(ト)の調名を指示するに在りますから通例之を(ト)の記號と稱します。蓋し樂鍵の所在は即ち(ト)調なりと一定しまする以上は之に依りて他の諸調名を推求る事は甚だ容易で御座りますから通例音階上には樂鍵のみを記載して調名を省略致します。

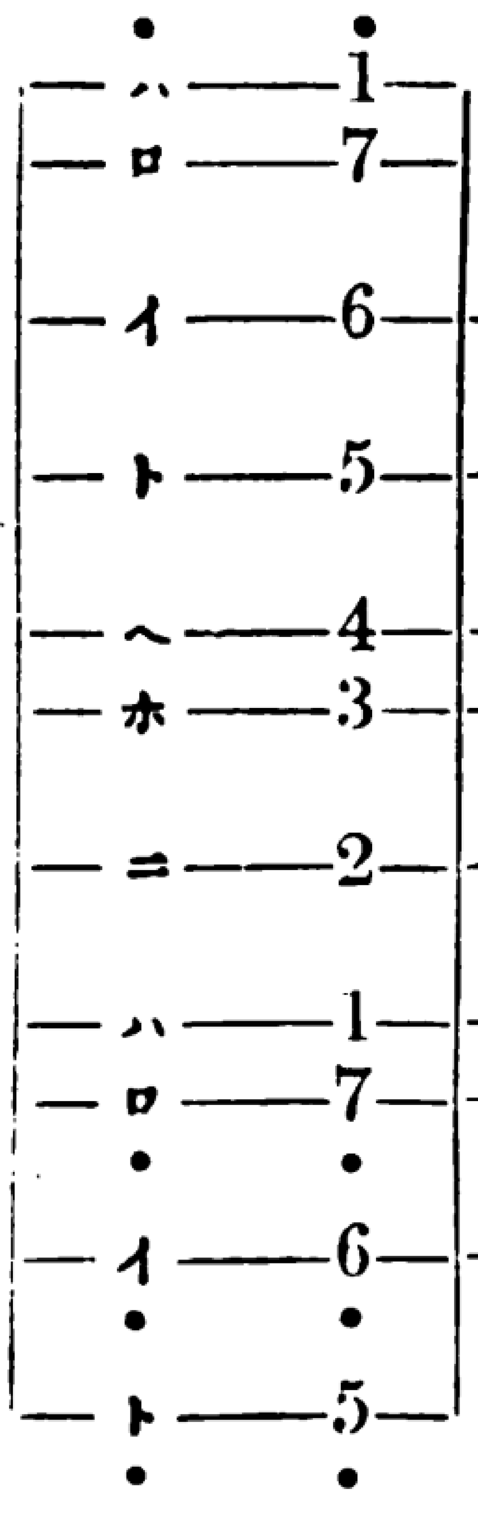
以上長音階の構成につき大畧述べ畢りましたから次は短音階に移りて簡短に申し述べましやう。

短音階は長音階の第六音を主調音(即ち基礎音)として成り立つもので御座ります。今(ハ)の自然長音階の第六階を主調音として一種の音階を構成するときは即ち(イ)の自然短音階が成り立ちます即ち次の通りで御座ります。

(イ)調自然短音階



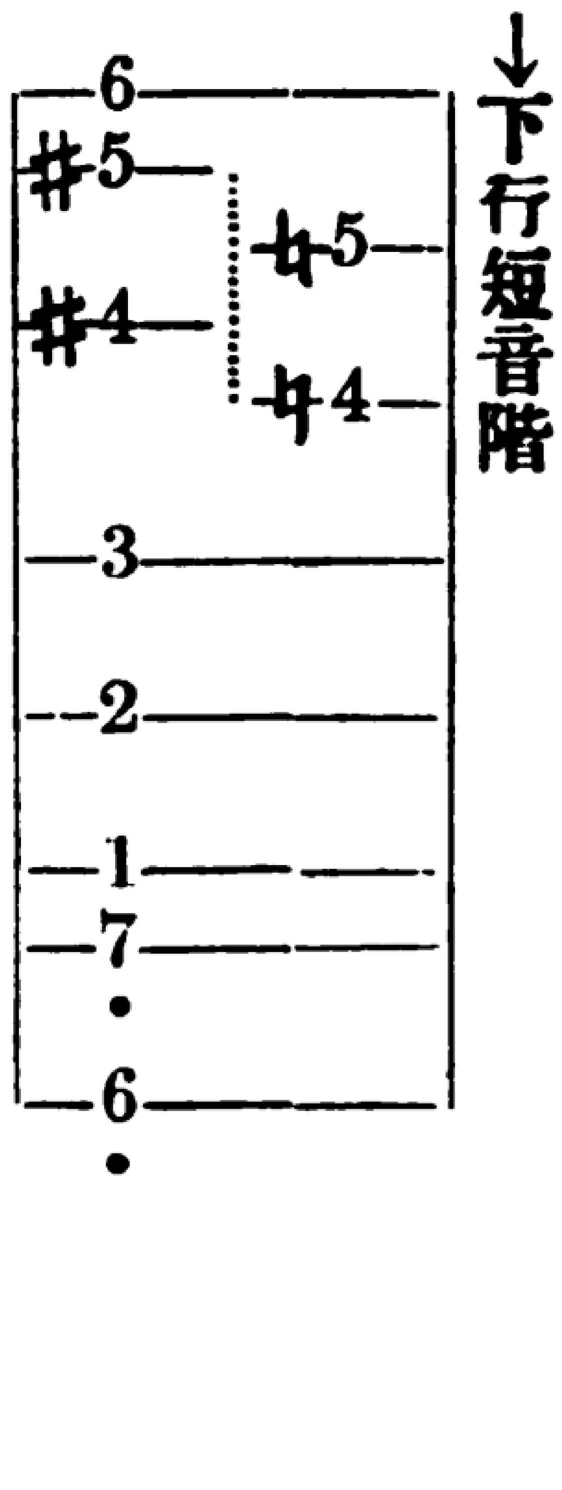
(ハ)調自然長音階



前記なる長短二音階は其効果の全く相反するにも拘らず其相

互の關係に至りて親密なるもので御座ります。故に(ハ)調長音階よりは(イ)調短音階を其關係短音階と稱し、(イ)調短音階からは(ハ)調長音階を其關係長音階と稱します。

倚自然短音階の第七音は自然の儘でも導音たるの効を有しませんから實用上では上行短音階に限り自然音より半音高めて嬰(#)となします此場合に於ては其第六音も亦た嬰として用ひます但し下行音階に於ても此二嬰音を更に自然即ち本位に復しますから此二音に本位記號(♮)を附して之を表します。即ち左圖の通りで御座ります。

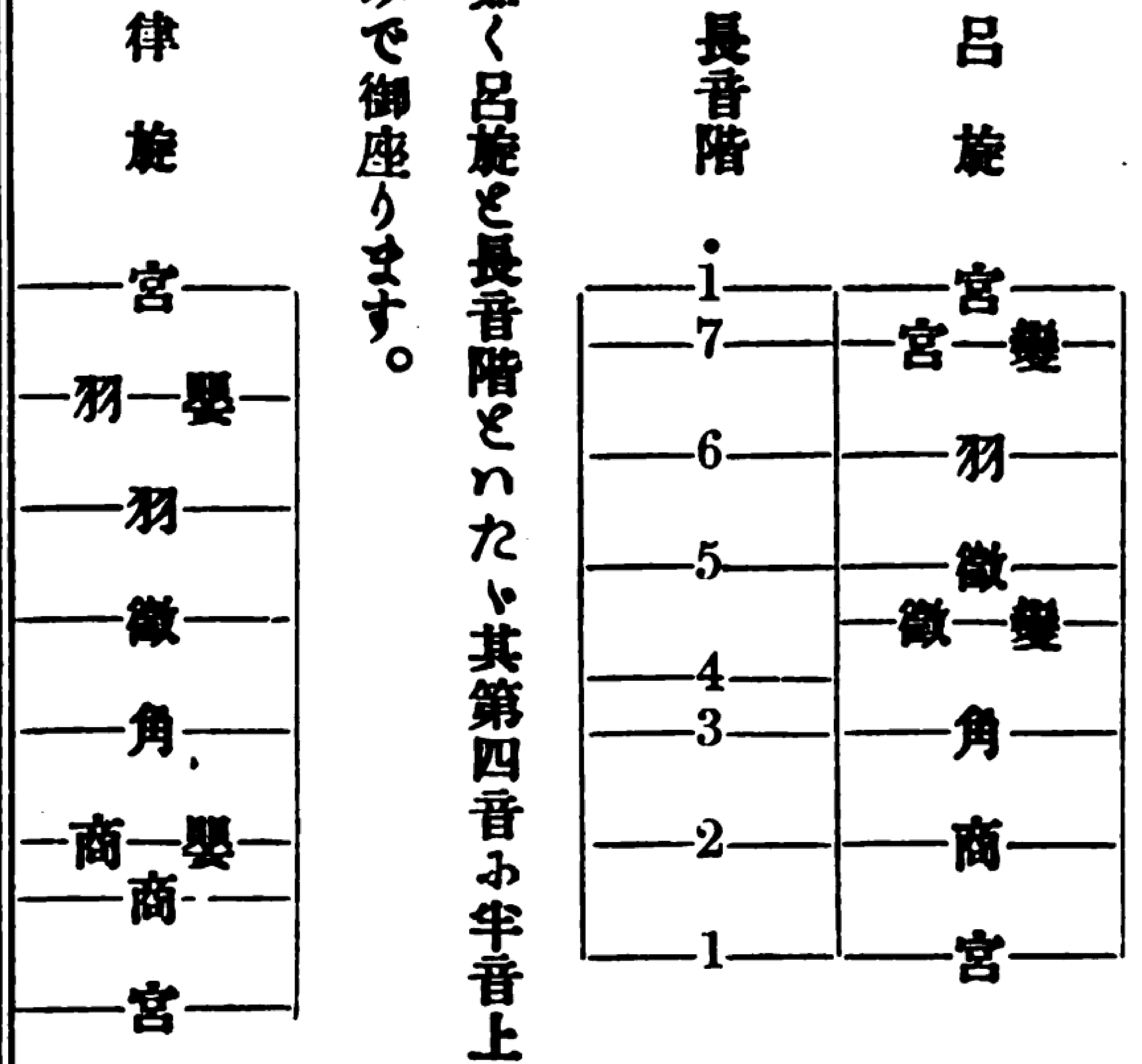


右の二嬰音を唱謠上一種の別稱を用ひます即ち#4は(ヤ)#5は(ツ)と稱します。

又右の短音階を旋律的短音階と稱して通例旋律上に用ふるもので御座ります。此外に和聲的短音階、混合短音階、など稱する短音階がありますけれども此等は先づ不必要ですから一切御預りと致します。

倚長短二音階の事は大畧述へ畢りましたから序に雅樂の旋法を聊か申し述べましやう。

本邦雅樂の旋法にて唱歌に關係あるものは先づ呂旋と律旋との二種で御座ります。彼の小學唱歌集中で人氣澤山な鏡なす、四季の月、皇御國、白蓮白菊、橘、天津日嗣(此等の曲のみ人氣澤山では困ります)等の諸唱歌は即ち此等の旋法に基きて出來たもので御座ります。古今之を音階に作りて西洋の長短音階に對照してみましやう。



右の如く呂旋と長音階とはたゞ其第四音に半音上下の相異あるのみで御座ります。

短音階

6
5
4
3
2
1
7・
6・

右の如く律旋と短音階とて只其第六音に半音上下の相異あるのみで御座ります。

猶又俗曲音階の事ハ多少聞き噛りて居りますけれども親しく研究致した譯でありませんからお話は致しません。

溝渠の歌。

美妙齋主人

一。深くとも、
狹くハ溝も世人に
墓無き物と思はれむ。
學の水量深くとも、
世に流す方狹からバ、
徒なる緣のミ見えて、
實の底ハつゆ知れず。

二。深くとも、
狹くハ溝も世人に
親しき物と愛でられむ。
學の水量深くとも、
廣く、驕りて流れずハ、
墓無き虫も懐來て、
飾の玉を浮ぶべし。

三。廣くとも
淺くハ溝も世人に
墓無き物と思はれむ。
學の幅も廣くとも、
底の汚泥わらはれて
道理の舟も通はねば、
智識の魚も簇がらず。

四。廣くとも
淺くハ溝も世人に
親しき物と愛でられむ。
學の幅は廣くとも、
淺しと見せて流れなバ、
まだ猶練れね少童だに
昵來りて泳ぐめり。

夜光の珠玉。

夜光の珠玉も磨かずバ、
光る由とて梨の木の
花も久しく雨風に
撲れて甘き實を結ぶ。
結ぶ枝折に文學の山、
分入る儘に足を噛む
岩巖もあれバ、足をとる
葛羅も許多アりろ海。
學の海に筆の櫂
取りて進めど狂立つ
風と波とに支へられ、
張たる胸の帆も皺れ、
心の綱もはや今
切斷えなんとする迄に
逆捲く潮のいと辛き
憂目に逢も事とせず、
九折なる岨途を
傳行くとも事とせず、
進めバ就て探得ぬ
深き處も探得て
夜光ハ珠も得なんめる。
愛たき花も得なんめる。

花廿五首

美妙齋主人

兎有まし角有ましと咲ぬ事も
しづ心なき山さくらバな。

栽花

世中の花のさかりを春ごとに　のくて知らむと移植てき。

尋花

呼子鳥聲をしるべ尋ねても　覺束あしや山さくらばあ。

初花

數々に所せからでさくらばあ　みつごの一の程ぞえあらぬ。

晩花

山ざくら夕のかねも曉の　鐘の響もうしろめたしや。

曙花

ほの〴〵と顯初めしさくら花　はた霞みたる明暮のそら。

夕花

山ざくらもふるる雲を帳にて　夜間の風や厭ふあるらん。

夜花

明日は又花咲それも嬉しさに　長からぬ夜ぞわが心なる。

風前花

嵐には終にのがれぬ花なれば　少時もみせせ世人のため。

霞中花

絶々に霞める花やうそずみに　濃墨にかける匂あるらん。

雨中花

白雪にまがふさくらの花盛り　雨は降とも消ずもあら南。

湖花

さゞ波や志賀の高嶺の花盛り　舟社よどめ滋賀の大和田。

峯花

我如く山の彼方も愛ぬらむ、　峯の櫻ぞこゝろ有りける。

谷花

折々は歸りてをあけ黄鳥の　谷の古巣も花咲きにけり。

關花

須磨浦や關吹越るうらかせに　花の香のみは許てぞやる。

瀧花

山姫の布さらせある瀧津瀬に　花の錦もれりそへてけり。

河花

飛鳥川あそも來て見ん櫻ばあ　この淵瀬には倣とずも哉。

汀花

あやしくも汀の櫻根にさへも　咲と見ゆるは浪の花かも。

野花

今幾日有ば花みむ、若菜つみ　飛火の野守知らん物かは。

島花

手折らずて歸るも口惜濱褒に　繪島のはなを書寫してん。

潟花

櫻花さきおほひたる松浦がた　唐ふねも漕ぎ寄りて見よ。

濱花

櫻花たかしの濱にさきぬとも　立仇波のあだあならひぞ。

古寺花

初瀬山御寺のさくら咲ぬ鳧、　少時は鐘を撞ずもあら南。

田家花

賤の男が己が物とて苗しろの　櫻あがふあしめれへて鳧。

山花

大比叡の高峯の櫻さかりに鳧、　五月の富士の深雪斗りに。

第八號に「春の遠山」とて掲げし唱歌を更にやつして　仝上

入月にこそさもあらめ朝開

霞にまぐる山のはや何。

春のはしめ山里へまかりて　齋藤濱子

かく南と告もれこせよ、此山に
もゆる蕨の折もたがはで。

其夜また　仝上

住難き心に見せぞやまざとの
月もればろは通はざり鳧。

野雉子　山家敏子

御狩野に渡し雉子も春きては
戀に死べき音とや啼らん。

風寒く花遲し。　美妙齋

春來ても猶山風のはやければ
雲の花だに峯にかゝらず。

（承前）　伊豫舍主人

下總なる藤澤村と過ぎて

賴むかげとて立よれば
なや袖ぬらそ松のつゆ。
笠置のやまと出でしより
天がしたにはかけしやも
ナキて落行く主從や……
隱岐のはまべの憂住寓。
松に吹きそふ磯わらし、
くだけて響く波の音に
假寢の夢とさまされつ。
血に啼く夜半も幾そゞび
帝のためにたれが身の
憂はものかはあさ夕に
かしまづきつゝ禍殃の
來らぬ前に隱岐の島
こぎて渡りて名和港。
名と後の世に殘しけり。
帝やそけきいさとしは
君にこそよれ、よれ君に。

新工夫髪飾

婦人方の髪が束髪となッてから以來從前などに髪飾が少焉の下の間は盛でありませんでしたが、根が日本人は簪や笄の下に支配されて居ますから此頃は又一種の折衷した髪飾がはじまりました。それは從前の銀や鼈甲の簪を小間物屋へ誂へて脚を短くし、そきと束髪の中插に爲る方か大分貴婦人の中にありまそ。それ插方は一本で、而も其簪の長さは丁度襟飾に用ゐる玉飾の脚と仝じほどで、即ち凡二寸ほど。簪の頭の千鳥や、牡丹や、蝶々が丁度髪の毛の直上に出て居ますから一寸見ると此等が輕く引掛ッて居る樣で、無論其脚も髷の中へ匿れて居ます。

日本古代男女裝束

淑女の方々が源氏や世繼など、古代の物を御讀みなさる時には多く、色々な着物の色摸樣の事が書いてある事に御目が注りましやう。是が中々覺えるには困難でそ。よッて爰でその注釋と御參考に差上げます。其前に「表着」、「衣」、「單衣」、この三種の物の區別が必要です。「表着」は名のとほり最上に着る物で、「衣」は其下へ着

るもの、及び「單衣」は「衣」の下へ着る物です。「表着」は「衣」と仝じものだなど、云ふ説は譃です。扨「表着」でも「衣」でも「單衣」でも皆此時候に相當した色合にするのが一般の制式で、男女とも決して背きません。最も世には變化といふ物が必有りますので、上古や中古や後世の時々に因つて衣裳付も色々に變革して、後世の物語に見える處と古代の物語に見えるのと矛盾して居るのもあり升。が此から記者が申すのは古代の制式、即ち、一條院頃の体裁です。

○表着第一　春冬の部

（イ）白き表着（皆紅の衣を着る時。其外五月から五節迄の間時々）。

（ロ）櫻の表着（紅の薄様の衣、又は樺櫻の衣を着た時）。

（ハ）紅梅の表着（梅の衣、白薄様の衣、又は櫻重の衣を着た時）。

（ニ）萠黄の表着（紅匂の衣、皆紅梅の衣、紫の薄様の衣、紅梅匂の衣、山吹匂の衣、松重の衣、裏まさりの紅梅の衣、又は葡萄染の衣を着た時）。

（ホ）葡萄染の表着（紅梅重の衣、又た紅梅匂の衣を着た時）。

（ヘ）魚綾の表着（裏山吹の衣を着た時）。

（ト）紅梅の表着（櫻萠黄の衣を着た時）。

（チ）櫻萠黄の表着（柳の衣を着た時）。

（リ）裏山吹の表着（花山吹の衣、藤重の衣、又は紫匂の衣を着た時）。

（ヌ）蘇芳の表着（松重の衣を着た時）。

（ル）松重の表着（紅躑躅の衣を着た時）。

（未完）

學藝

蟲の話

蟲は種類多く其數は迚も數へ盡されぬ程ありますが、これよりお話を致します。蟲は成長した後六本の足が生へる蟲に限ります。かやうの蟲を六足蟲と申します。蝶、蜻蛉、蟬、蟋蟀、蠅、蟷螂、金龜子抔の類は皆六足蟲でござります。さて六足蟲が十分に成長した後は皆三對の足が生へますが、まだ十分に成長いたさぬ前は足の無いものもあり、又足の數の多いものもあります。

唯一口に蟲と言ひますとつまらぬもの丶樣に思はれて、此忙しき世の中に蟲抔のことを學ぶは無益だと仰せらる丶方もありましやうが、暫く忍んで記者の説き出す話をお聞なさり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ませ。

六足蟲にも澤山の種類がありますが、互に似寄る性質によりて類を分ければ大約九類に分けられます。先づ第一に翅の無い六足蟲よりお話を致しましやう。

第一　無翅類　はねのない類

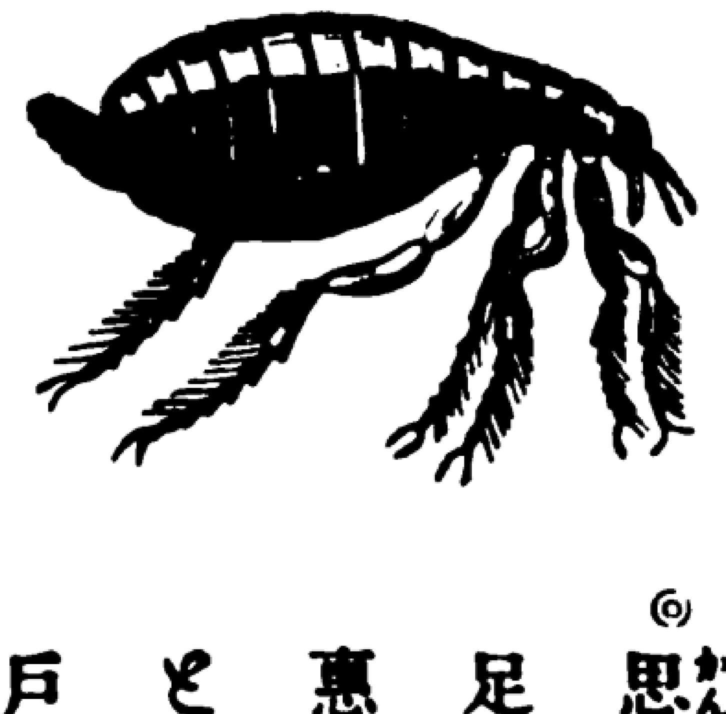
はねの無き種類は、至て少なく、此類の六足蟲は唯蚤と虱ばかりでござります。されども蚤や虱にもまた様々の種類があつて一々説くことは出來ませんから先づ皆さんのよくご承知の人にたかる蚤と虱のお話をすると致しましやう。

一　蚤。蚤の形は細長く扁く、全身栗皮茶の堅き皮を被れば指の間にて撚る位にてはなかなか潰れません。頭は割合に小さく二本の細き角の様なものが生へて居ますが、これは觸角とて物に觸るとき其堅き柔らかきを知る道具でござります。されば蚤が跳廻るときは絶へずこの觸角を動かして居ます。眼は頭の兩側に一つづゝありて圓くて大きく、嘴は鋭き鋏を護謨管の内に入れた様な形です。蚤が人を刺すのはこの鋏にて皮膚を切り、その切口に嘴の管を差込んで血を吸ふのです。

さてまた蚤の体は十三の節に分かれて、其第一の節を頭と言ひ、第二第三第四の三節を胸部と言ひ、第四節以下を腹部と言ひます。足は長くて強く、細き毛が一面に生へて、節が五つあり、足の先には爪あくして外に曲りたる一對の鉤がありまそ。六本即ち三節の足は皆胸部に生へ、前足は胸部の第一節より出て、中足は第二節に附き後足は第三節にあります。蚤の足は皆堅固ですが後足は殊に堅固で強うござります。

蚤の飛ぶ勢の強くして早いのは蚤を捕へるは虱を捕へるより難きにても知れますが、何年の頃何人が作りたる譚にや、一蚤は足健けれども。

蚤



◎思慮深く、虱は足遅けれども智惠あり、ある蚤と虱と互ひに江戸見物の約束と爲し各出發の日を定め早く日本橋に着する事を競ひたるに、虱は飛脚にたかりて速く到着し蚤は己れの力を恃んで却て虱に負けたと言ひますが、この譚は蚤の性質をよく辨へぬ人が作つたものだと思ひます。記者は強ち蚤の最負とするのではれありませんが、蚤は力も強く耐忍も強く又藝能もあるお話が澤山ありますから其話を一つ二つ申上ましよふ。

佛國の動物學者ヂオフロイの著はした六足蟲の書には左の

話が載せてあります。英國の名工某曾て六疋牽の馬車よ四人の主人と二人の從者を載せ、一人の馭者が馬を御ふ所の彫刻を象牙よて作り一疋の蚤に此彫刻を牽せたとが有ました。

又佛國のワルケニール伯の著はした動物書にも左の記事が書てあります。「西洋紀元千八百二十五年の頃パリ、リオン、其外繁華なる都會ふて興行したる蚤芝居は一時評判高く實ふ見物人を驚かしめたり。舞臺の正面ふ小さなる硝子の箱あり、箱の中ふ磨きたる硝子の板ありて、三十疋の蚤其板の上ふて軍隊の操練を演す。蚤軍の兵卒ハ各手ごろの槍（木のそげを細くけづりたるもの）を持ち皆後足ふて歩み士官ハ四輪の馬車ふ乘り二疋の蚤此車を牽き、又二牽の蚤ハ大砲を乘せたる車を牽く。此軍隊ハ行列を正し歩調を整へて聊も亂るゝことなし。此蚤芝居を興行してより二年半の間ハ其蚤何きも皆健康にして一疋も死したるものなし。この蚤餓ゑて食を求むるに至れバ興行者ハ蚤を摘んで掌中ふ置くこの時蚤ハ掌中の血を吸ふて飢を醫す。又蚤若し怠りて操練するを厭ふときハ炭火を取て蚤に近附くれバ蚤ハ忽ち興奮して運動を始めたり」といふ。

此外まだ面白き話ハ澤山ありますが、こゝから蚤の成長する有様を說きましやう。蚤は一時よ八粒より十二粒の卵を產みますが、決して人の体ふハ產みません。卵を產み附けるのハ地中か、疊の敷合、又ハ缺くその中です。動物學者チァランスの實驗ふよれハ、蚤が卵を產附けた塵の內よハ必ず黑光の小さな粒があります。此粒を蚤の糞だと思ふ人がありますが、これハ大きな間違よて、此粒は蚤の母親が蚤兒の爲よ貯へた食物よて母が曾て人の體から吸取つた血の塊でそ。

此卵ハ夏なれば四五日冬ハ十一二日にて孵化て、白き小さな毛蟲になりまそ。此毛蟲ハ蚤の成長する第一期ふて蠶の桑葉を食ふ時と同じです。裸蟲でも毛蟲でも總て六足蟲の第一期を蛹と言ひます。蚤の蛹にハ足が無く唯體後よ二本の鉤がありて、體ハ蚤と同じく頭と胸部と腹部の三部ふ分きて頭にハ二本の觸角があり、眼ハありません。不具の兒やど可愛ひものハ無いと申しますが、蚤の母ハ眼もなし足もない樣な不具の兒ハ嘸可愛ふござりましやふ。母が卵を人の體に產まつけず態々塵の內に產むのハ其兒の人に害せらるを考へてのことゝ思ハれます、なんと智惠の多い蟲でハござりませぬか。

さて蚤の蛹ハ母の惠みの食物と塵とを食ふて追々成長し、大略二週間の後よ至きば食を休み暫時眠る樣で動きませんが

終に口より絲を吐き出し小さなる白き繭を作りて、其内に籠り再び變化りて蛹になります。これが蚤の成長の第二期です。其後又二週間を經れば終に十分成長したる蚤となり繭を破つて飛び出したのが皆さんのお嫌ひなさる六足蟲です。

夏蚤の多い時雌雄二疋の蚤を捕へて袂くそを入れて硝子壜の中にて飼へば蚤の成長の有樣はよく分ります。

叢話

酒井忠直の夫人。

酒井忠直の夫人は振子とて、松平隱岐守定賴の女で、中々人に秀れた氣象を持つて居た人です。ある時其第宅の近處に火事が有つて折節風も烈しく、直に第宅も燒けさうに爲りましたので人々も大きに驚き、早く奥方は御立退遊ばせと立騒いで居ました。處が爰に奥方附の一人の侍女が其時生憎病氣で立居も不便で、打棄てゝ置けば燒死ぬに違ありません。けれど乘物の用意は勿論出來ませんので人々も當惑して居ますと夫人は些しも騒がず屹と思案して長持を空虚にさせ其中へ蒲團のまゝ其病人をかき入れさせて見事無難に運ばしてやりました。其心の沈着て居る事は尋常では無いと世人も評判しました。

更に是より猶一層の美德を此夫人は持つて居ました。殿の忠直は愛妾を澤山持ツて居て、それ故それらの腹から出た若君も澤山ありましたが夫人は些しも其子供を憎む体無く殊更寵愛して丁寧に養育しますので忠直も賴母しく思ひ、夫婦の中も、それゆえ、極めて睦ましく、感心さない者は無かッたと云ふ事です。もとより婦人は夫に從ふといふ往古の誡戒の下にあッて此夫人も斯うして居ましたので之を直に今日に適用する事は六づかしいですが、その當世にあつて氣象の人に違ッて居た事はすべて皆此類です。

團欒の餘波。

眞野らく子投寄

城西巣鴨の里は昔より槖駝師軒を並べ、春の花秋の草の時節には都人士の筇を曳くも多く、家々競ひて樹藝の事を勤むる場所なるが、今より十餘年計前の事とかや倉田藤平といへる槖駝師ありけり。夫婦の間に一人の息あり。其名を守三郎といひ、温和き性質にて兩親の寵愛一方ならず。或日の事藤平は東京にゆきて種ものを買ひ來れと守三郎に命じけり。守三郎は下谷廣德寺前の種物屋に至りしに折から店頭は人の山

を築くばかり混雑を極めたりしが暫し待つ程に皆々用と足して歸り去りしとき番頭は守三郎の方を顧み「エー何かお入用ですか。ドウもお待たせ申しました」。と言ふに守三郎は點頭て番頭の手に書附を渡しながら「是だけ御父樣が買て來いと申しました」。

番頭は紙袋を取出し注文の種物を拾ひ込みつゝある折から四角張ッた荒くれ男が入り來りさま、「モー出帆が先刻頼んだ種物はまだ出來ねーか……ソシテあの……花瓶の荷造はドドウした何處に在る」と急き立ちていひければ番頭は指しながら「アナタのお頭の上の棚にムいますが忙しくて誠にお氣の毒樣……此子供衆の注文を濟ませましたらば直と差上げます」。「ナニ子供の注文だと、モー出來てるじやないかサー早く持つてお歸りヨ」といひつゝ件の男紙袋を守三郎に渡せしが持ち樣の惡しかりしか括り樣の緩かりしか紙袋を取擧ぐる機に袋の口は解けて板間一面種物を撒したり。されども温和の守三郎は更に怒れる氣色もなく飛び散りたる種を拾ひ居たり。

折から一人の水夫と思しき男馳せ來りて門口より件の男に向ひ「船頭さん風がいゝから早く支度なさい風が變るかもしれません」。船頭は遽てゝ門口に出でんとせし時守三郎は花瓶を置きある棚より吊しある細引繩の船頭の足に纏へるを見て直と船頭の足を拉へ「アナタお待なさい……一寸お待なさい歩てはアナタの花瓶が壞れますヨ」。

船頭は立止り見れば靴の鋲に細引繩の纏ひて今一歩進みなば瓶は棚から墜つべき有樣なれば守三郎の頭を撫でながら「お前さんよく言つて下すつた是は大切な品で遙々何百里といふ長道中を此處まで安全に持て來たもので國の細君への土産だから……ヨク言つて下すつたこれこそ仇を恩といふものだ」。番頭の方を向きて「番頭さん一寸それを下してくださいナ」といへば番頭は花瓶を卸して渡したり、船頭は花瓶の中より蘭の根二株取出し「お禮に此蘭の株二ツお前さんに進せます大事に世話をすれば珍しい種だから日本一の蘭が出來ますヨ」。守三郎は之を受け納め幾度となく禮を述べ早く此珍しき獲物を父に示さんとて家路を指して急ぎけり。

茲に同じ里に同じ生業を營む奧利助と呼ぶものあり、一子淺二郎は守三郎と彼是同年位にて殊に兩家は裏隣にて其間には矮き石塀あるのみなれば互に往來して最と親しき朋友なり。守三郎は家に歸りて父に見せたる後淺二郎にも見せんも

のと圃に來りて石塀に近かんとするとき不圖見れは日頃大切にしたる暖室の油紙が破れて室の中に昨日まで鮮娟笑を含みたる牡丹の花も莖折れて萎れ居たれば「オヤ」と言つたばかり呆れて居たりしが此時隣の圃にて仕事をなし居たりし淺二郎は守三郎の聲を聞き「守さんわるいとをしましたお前さん實は私がネ今朝草を抜て捨てた處か草の根に石がからんで居てツイ疎忽をしました」。

守三郎は破れたる油障子を取外し牡丹をながめながら何か活きたものに言ふ樣に「可愛さうに手前はモー助からないヨ、ア丶いくら言つても後の祭だ。だからチー淺サン此事はモー話しつこなしにしましやうチー」。淺二郎は之を聞き「ソーお前さんがドンナにお怒りだらうと思つたヨこれがアベコベで私のものをお前さんが壞したのなら私やドンナに怒つたかも知れないヨ」。

「その話はよしにしてマアこれを御覽」といひつ丶蘭の根を示し船頭の話と花瓶の話の一伍一什を語りて蘭の根一株を淺二郎に分ち與へければ淺二郎はさも嬉氣に禮を述べ「ドウもお前さんが怒ないから私や怒られたよりも氣の毒になつた」。

淺二郎の父利助は瑣細なる事に怒り易き性質にして「人は盜賊明日は雨」といへる俚諺の意味を誤解し何人にも疑念を置く癖あり、平生人に語りて「世渡は人を搆付けぬが第一なり情深きは身の損なり」といへるにて其人柄を知るべし。最初倉田藤平が隣家に引越し來りし時より倉田は上州生れと聞きていたく嫌ひ居たり。嘗て利助が上州の行商に騙られしとありしより上州人は皆狡猾の人間ばかりと思ひ居たればなり。然るに倉田は思ひしよりも正直なれば少しは考も變りしやうなれども尙内心疑念はれず「正直も上邊ばかりの見せかけだらうドーセ上州者だから油斷はならん」と思へり。

倉田の圃には珍しき蜜柑樹あり其實は不思議なる計大くして每年實のる時節には纍々として枝もしをる丶ばかりいとも見事なれば市中より態々見物に來る人多く倉田の蜜柑といへば誰知らぬものなき程なり。一夜利助は藤平の來りし時話しの序に「時にドーして見事に蜜柑を育てるか」といへば藤平は笑ひながら「秘傳があるのサ」。利助は少し調子を變へ「秘傳とあれば達て聞きますまい人樣の秘傳に邪魔はしません」。藤平はや丶利助の詞遣荒きを見て逆ひもせず「温言能く怒を釋く」といふとを知りてければ話頭を轉じて四方八方の話をなし居たる折から來客ありて話も其儘途切れて藤平は家に歸

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

りぬ。

利助は蜜柑樹を貰ひたいといひかけんとせしときに人に妨げられたれば翌朝に至り自ら貰ひに行かんと思ひしが氣も進まずためらふ折から妻が買物に出掛くると聞きて「お前一寸序に隣へ寄て蜜柑苗二三本貰つて來ナ」。

妻が歸りていへるやう「倉田へ參りましたれバ進上する苗ハございません、ムいましても私方の子供に遣はしますので外様にハ上げられませんとかやうに申しました」。利助ハ此返辭を聞くや否やクワットせきあげ「ツーだらうと思つたて上州者にハありうちの事だ吝な奴じやイヤモー上州者にハ死でも口を聞かぬ」。これより又々十年以前上州の行商に騙られし話をなし「だからモー倉田にハ一生口を聞かない」。

利助ハ今圃より入來る淺二郎を招き「淺やお前ハ已后決して倉田の息と遊んでハならないヨ今日今から決して何事でも一緒にするとはならないヨ」「お父さんナゼ」「ナゼッて聞かずとも、いゝ」「それじや私やもう守さんの圃へ行くともならず守さんも内の圃へ來るとがならないの」「そうよ親父が己に無禮をしたから」といひそなされ淺二郎も力なく「それでハ詮方かありませんから仰やる通りにいたしますがもう一度だけ守さんに遭つて已后口を聞かないのハお父様の吩附だといふとを話したいから一度だけ許して下さい」。淺二郎ハ漸くのと許を得て二人の朋友ハいとしみ〴〵と語りあい涙ながらに手を分ちたり。

現時物語婿引の卷。

襖越の品定。

六郎とかむ呼べる公達、さまかたち閑雅て才なんどもいみじと眩きまでに稱へられつる程にいつか彼是の人も聞知りつ、「あれハ蓮花に比へけむ往古の君もようせずば此君に名をや奪ハれむ」など京わらべの口さがなき、より〳〵いひあへるを、あるハあからさまに「婿にせむ。御肴にハ何よけん」。なぞ催馬樂のためし引く巫もありけり。野分だちて風さむき秋の夕かとよ、都にてなたゝる錢屋のあるじ、其國に聞えたる年若き博士どもつどへて學の道の物語しつ。此君もおなじ席に出でさせ給ひける程に、あやしくも隔の燕ぶすまわづかばかり開きたる。あれハ如何と心附く者もあらざりしを、さらでも眼早き博士の一人ハ其心とや得たりけむ「空炷のかをりのえならぬハ何」なぞさま〴〵に戯れしとわりなしと並居る人ハ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つぶやくめるに、この博士より襖のあなたにやのめける、たわゝなる物でしぞほのぐらき燈火よりすみて聞えたる。

まうんでゝハ博士のむねいとゞ安からず。一人もあらんに博士をなぞうく然氣も無く……」と思積けて一日二日ハ過ぎけり。人もれぞろきけり、そのほどに錢屋の愛娘ハうの若公よ嫁ぐとなん。「さればこそわが料りしことのあやまらざりしよ。雨夜のしなさだめとハ聞きつるも學の物語めうして襖越に品定せんとハ思ひきや。このうらみ得なん思斷つまじき。世の人のそしりうしろめたさよ」。

批　評

學海居士里見八犬傳批評の第一

依田學海氏が出版月評の第三號から引續いて載せられた八犬傳の批評は流石に屈指の批評家の手に成つた物だけあつて中々面白く思はれますが、去かし其中には聊か記者の意見と違ふ件も有りますので爰でその批評の批評が生れました。

依田氏の批評の第一は斯うです。「この書仁義禮智の德を主として著を然にそ人物の生ずる始必ず高明至平ならざる可らざるは主當に非ずや。然るに趣向を因果の理に原し、淫婦の祟をもて原とし、終に妖獸をもて父とし、貞靜幽嫻の淑女をもて母とする最も忌むべく、惡む可きをなして發端とす。假令作者の妙筆をもて淑女が妖獸の爲に汚されざるが如くに綴り成せども、これが歸着する處を論するに至りてかの八犬の名稱をもて推す時は妖獸の子たる事免るべからず。殊に伏姫の神聖なるもその死して靈となるの基を推す時は妖獸の爲に汚されずと雖もなほ其氣を受るといふ、是れまた妖獸の妻に非ずと言ひ難し。斯る不祥の配偶をもて端を發するに及ばずともその趣向幾多も有るべし。云々」

此論の出來た基は何かと言ふに「仁義禮智を主とするからにも人物の生ずる始も高明至平ならざるべからず」の一點です。何故に、仁義禮智を主とするからには人物の生ずる始も高明でなければならぬのです。「仁義禮智を主とするからには人物の生ずるそもそもも高明至平である方がむしろ高明至平で無い方より秀れて居る」といふだけなら無理な評でもありません。「是非高明至平でなくてはならぬ」といふのは餘り餘計な注文です。如何にも依田氏が云それたとほり、水滸には潔白な、天上の星辰が下つたと有つて隨分清淨よも見えます。それなら百八の人々が盜賊を爲たのはどういふ譯です。「そは遭際の不幸によりて止むを得ずこゝに至るのみ」と依田氏ハ辨護を爲さいます。が、已むを得ずと言つて仕舞へば何も論ずる事はありますまい。八犬傳も全樣です。是にも全く理に因つて「已むを得ず」といふ便利な句ハ直に用ゐられましやう。

依田氏は八犬傳の趣向が因果の理よ本づいて居るのをば何やら擯斥される樣です。儒教の外には宇宙の中に猶秀れた教は無いものと妄信して居た時代ならその樣な評も褒められましやう。因果の道理を實に無垢の元則だと信じて居る人の多い時世には迚も通りは爲ますまい。

氣を受けたから伏姫は妖獸の妻であるの、受けなかつたから妻でないのと云ふのは到底不定の問題です。何故なら、其問題が起つて來る原因が既に不定の物ですから。それを唐突に斷定するのは「大」の字を大學の大の字だ、否、大馬鹿の大の字だと論ずるのと全く事。是で八犬傳の脚色に一分も瑕は附けられますまい。

よしや妖獸の氣を受けたからには淑女も妖獸の妻だとの斷定が眞實であつても、まだ猶其効力をば打消す處の物が有ります。御覽なさい、八犬傳を。平均相償はしむるために法華經の功力を舉げて、その爲に如是畜生も發菩提心の實相を受けて雲霧も晴亘つたとあります。たとへて淑女が妖獸の氣を受けて居ても、(之を其頃の理學で推せば)既に法華經の功力によつて濟果を遂げ、全く無垢になつた趣も十分に現れて居ましやう。是でも八犬傳は不祥の作ですか。否さ、卑しい趣向ですか。

依田氏の批評の第二は斯うです、─「八犬士等が故郷を出立たるよりして諸國を流浪する時よ至るまでの艱難辛苦よ付ての物語も……大底己が不意に出で、一時の禍に罹りし事多し。されば我志を成さんさしてその羅網に陷りしにも非ず、又難

を犯し、恨を含みて共居に違ひしにも非ず。或も不幸にして奸徒の爲に拘まれたるか或は己が意を用ゐざる傲慢よりして匪類に欺れたるに過ぎず……獨犬坂毛野のみは艱難を犯して遂に父の讐を復したるは危を犯し、苦を喫するの益ありといふべし。然れども里見氏の爲にせしことならねは本人の發端といふべし、主眼をべからず。」

此批評の趣意を味へば、其趣意は何となく、成功をした者のみが豪傑だといふ樣な傾になつて居ます。が、それは兎も角も、自身の不意や傲慢で七犬士が殘らず究阨を受けた樣に評してあるのも苛酷です。言ずともの事ですが、相當の注意を施しても尚意外の變に襲はれるのは英雄でも常人でも全てで、意外の變も防禦から結果に就て判斷すれば防禦の手段は有りさうに思はれます。

依田氏は信乃の古河の難を評して「己が父より傳えりたる寶刀を奸徒の爲に欺き盜まれたるを知らずして成氏謁見の當日に至り、はじめてその僞物なるを知り、言解くに說無くして圍まれたるに非ずや」と言れました。なる程奸徒に寶刀を既に盜まれたのを知らずに居たのは信乃が一世の不覺でしやう。が、通常の場合なら芳流閣上に飛乘るやうな珍事には、たとひ刀を僞物でも、ならなかつたに違無いです。なぜです。信乃も旅宿で刀をぬいて其僞物なのを始めて知り、直に其由を上に言上しやうとする時、在村から使者が來て、それから兎角言上する便宜をば得なかつたでしやう。既に左樣なら此便宜ハ信乃が求めて失つたのでハ無く、便宜が便宜を失させたのです。それなら罪ハ便宜にあります、決して信乃にあり升まい。事實の不顧は始のみでは無いです。成氏に謁見して信乃が僞刀の分解をする、それを尓時に先方では疑つて理非も正さず、直に干戈を動かせました。罪ハそもく誰にあります。そもく何方が疏忽です。言ずと知れた、成氏が間違つて居ましやうか。

講義

用器畫稽古の仕方。

ひさ 述

前號には繪畫の女子に必要なるを說き兼ねて追々其稽古の仕方を掲載すべき旨披露いたし置きましたが、差當り女子の手工に必要なる用器畫を稽古する方案を述ぶることゝいたしました。

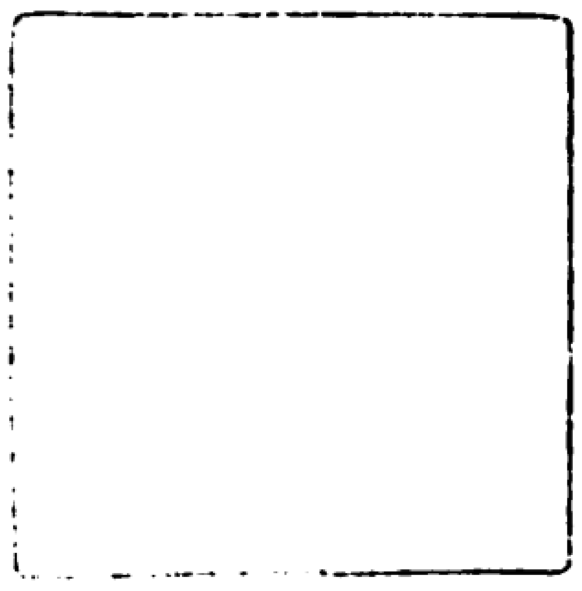
本題に取掛る前に一言お斷りいたしおきたき事がムいます。世間で用ゐまする辭には曖昧なのがムいまして、十五夜の月も圓いといひ、十六夜の月も圓いと申しますが、月は盈虧するものですから十五夜の月が圓いなれば十六夜の月は圓くない筈なれども、世間一般に圓いと言つて一向差閊はない、甚しきは婦人の月旦に何處の阿嬢は丸顔だなどゝ申しますが、眞逆規で計つた譯でもありますまいけれども是でも差閊はない。しかるに用器畫にては箇樣な曖昧な事を許しません、たとへば圓といへば規にはまるものに限る、少し歪ありても圓とは申しません。それですから如何なるものを方といひ又如何なるものを圓といふやを定めおき此定めに合ふものは方といひ、圓といひ、此定めにあはぬものは其形似たるもかく呼ぶと能はざるものと定めおきます。

有合の紙を以て手のみにて正方形を作る事。

今申しゝる通り第一に如何なるものを正方形といふやと定めおかねばなりません。正方形とは眞四角のことで第一圖に示す如き形といふのです、けれども是だけではボンヤリして

どうして作れるものといふ考の付け樣がありません。そこで考をみちびく爲に精密に申せば第一圖を御覽なさい、四ッの

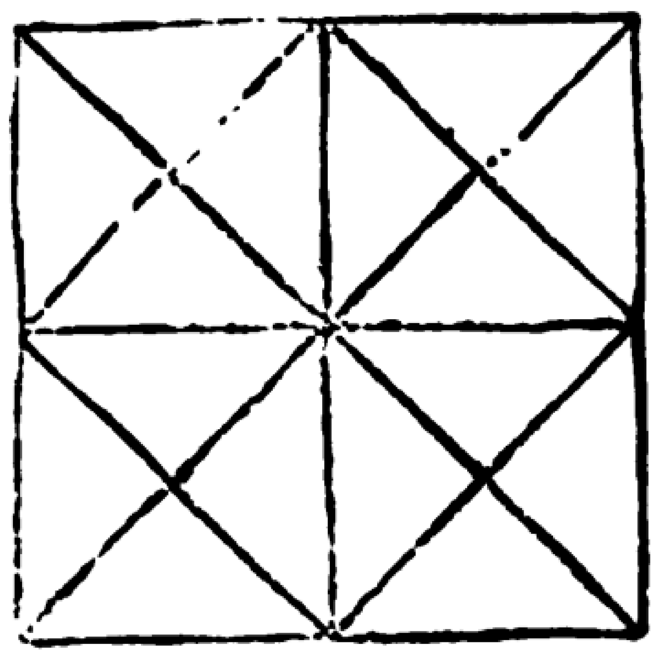
第一圖



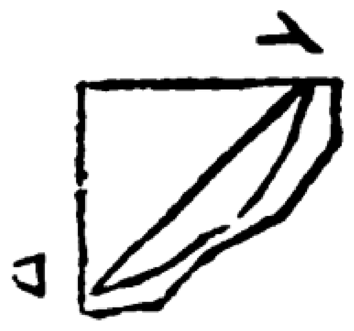
線がある（畫學上之を邊と名く）其長さハ何れも同じことです、又四ッの隅がある（之を角と名く）其廣がりハ皆一樣で矩形になつてをります。矩形とバかりでは充分でありません。今どんな紙でも二に折りますと其折目に眞直なる線がつきます、此線の通り鉛筆にて紙上に引きたるものとバ畫學上の直線と申しまそ。此二ッ折の紙の折目と重ねて今一度疊みて之を開き見ると折目が四ッ出來て、此四ッの折目が出會つた處に四ッの角が出來て居ります、此四ッの角は其廣がり一樣にてかやうにして作りたる各の角が矩形で之を直角と申します。そこで今一度反復して言つて見れば「正方形ハ四邊形にして其各邊の長さ等しくして其各角皆直角を以て成りたるものといふ」。これで正方形がきまりましたら、これから其作り方に取掛りましやう。

正方形の一の角からその向ひの角に直線を渡しますと、一の正方形が分れて二の三角形となりまそ。今引きました直線を「正方形の對角線」と申します。殘りの二の角に今一ッ對角線を引きますと、二ッの三角形がまた分れて四ッの三角形が出來ます。そして此二條の對角線が行違ふ處に四ッの角が出來て各直角です。又かやうに正方形の中に引きたる二條の對角線ハ其長さ同じことです。そこで前の四折の紙に付きて考へ見れば折目の出會ふ處ハ對角線の出會方と同じく、折紙の四ッの角ハ對角線によりて作くられたる四ッの直角と同じことです。此四折の折目と對角線として正方形を作るには二條の對角線の長さを同じくするのが眼目です。さて對角線の長さと

第三圖



第二圖



同じくそるには四折の折目と今一度重ねて疊むと對角線となるべき折目が重なります。此重なりたる折目と又重ねて疊むときは對角線の長さがきまり、切捨つべき紙の端が一處に重なると第二圖に示すやうになりまそ。そこで（イ）（ロ）の邊に沿ひ鋏にて紙端を切り去り、開き見れば第三圖の如く折目で十六個の等しき三角形か出來て其全形ハ求むる處の正方形です。

正方形を畫く事。

紙を折りて正方形を作ることは出來ましたが、正方形を畫くのはどうするかといふに、その畫法は種々あります。中で容易きは曲尺一本と薄板の三角定規（三角にして一角は直角のもの市中に賣つてをります價は四五錢位）とで畫くのです。三角定規は直角を畫く爲め曲尺は寸尺を測る爲めです。此等二ツの器械を用ゐて正方形を畫く事と前の説明をよく合點すればくどくどしく申さずともおわかりでしやう。唯圖はなるたけ細き線にて精密に畫くのが肝腎ですから、堅き鉛筆（H字の記號あるもの）を削り粗き西洋紙などによく其尖を針のやうにして畫くのです。

正方形を紙にて作るとも畫くとも出來ましたから、此理窟を應用して次の題を考へて御覽なさい。

（一）四寸の角の正方形の中には幾何の一寸平方を容るべきかを精密に圖にて示せ（一寸平方とは一寸角の正方形をいふなり、尤も曲尺と三角定規とのみにて畫くべし）。

紙を折りて作りたる第三圖の正方形の中には等しき十六個の三角形が出來ました。又四寸角の正方形の中には四四の十六で、等しき正方形が十六出來ましやう。そこで第三圖の正方形の邊が四寸あるとしますれば其中に出來る一個の三角形と一寸角の、正方形とは大さが同じでしよう。此理によりて次の題を

（二）一枚の紙にて作りたる正方形を切り之を繼合して其半分に等しき正方形二個を作り得るか（但し手のみにて）。

（三）一個の正方形を二ツに切り之を繼合して一個の三角形を作る法を圖にて示せ（大さは精密に同じきを要す）。

「四邊形にして其相對する二邊づゝ同じ長さにして各の角皆直角なるものを長方形といふ」。

（四）正方形を畫きたる工夫によりて長さ三寸巾二寸の長方形を畫き得るか、又其中には幾個の一寸平方があるべきかを圖にて示せ。

（未完）

餘興

幽靈をあらはす新法。

障子の這方に坐ッて居ると不圖障子に映る影が有ります。れや可笑しい、おもて何だらうと思ッてよくよく見ますと、まどうでしやう、それは外の物でも無く、髪をおどろに振亂した幽靈の影で、那方へ行ッたり這方へ來たり、はじめて小さかッたのも見る間に段々と大きくなりまそ。障子の向にも燈も無くもありません。が、その燈が明るくなッたり、暗くなッたり

その有様實に人をして思わず身の毛を愈立させます。その内お幽靈の影も障子一杯よ廣くなると思ふ間お段々と天井の方へ昇ッてしまひ、やがて其が落ちたと思ふ間よ燈火も明よなッて幽靈の影も見えません。

是と向うすれば出來ましやう。別よ六箇敷こともありません。只蠟燭一挺と白紙が一枚あれバ十分です。先紙で幽靈の形を切抜き、その顔の邊へ小さな穴を開け之よ長四寸ぐらゐの紙捻を一寸徹し、さて其紙捻をバ蠟燭の心の中の穴へ少し曲げて立てます。

それからまた長さ二尺或ハ三尺（幽靈を長くあらハして置くよハ長くし一寸あらはすおハ短くします）の紙捻よ蠟を或ハ太く或ハ細く、或ハ眞直、或ハ曲げて引き、その紙捻をも前のと全じく蠟燭の心の穴の中へ圖の様よ曲げて立てます。そして幽靈を障子の左から出さうと思へば紙捻の先を右よ向け、又右から出さうと思へば左お向けてそれを圖であらハせば凡このやうな工合で無論蠟燭よハ火が点いて居ません。

さて障子よこの幽靈の像を出すよハすなハちィへ火を点けますので、左様するとィの紙捻おハ蠟が引いてあることゆゑ、火ハ段々よ燃えて行きます處が、もと〳〵其蠟ハ色〳〵よ引いてありますから、其引方の太い處でハ光が明るく、細い處でハ暗く、そして火が上下へ傳ハりますから、幽靈の影は那方這方よ動いて現れます。其内よ段々前の紙捻も燃えて來るよ隨て幽靈は前よ進ます、そして其燃て居る處と幽靈との巨離が次第よ近くなるよ從ひ、幽靈の影も自然大きくなつて終よハ障子一杯よなるほどおなります。其頃丁度紙捻と蠟燭の心の側まで燃えて來ますので、また幽靈の影を次第よ天井の方へ昇つて行くやうよ映り、其内よ紙捻も燃盡きて其火が蠟燭の心へ点く途端よ幽靈を支へて居る紙捻もすらすらと燃えて幽靈ハ落ち、直よ後ハ蠟燭がたゞ一人明よ燃えて居ります。其處で縦覽人を直よ呼込んで中を見せましても仕掛のやうな物ハ些も見えますまい。此際注意くべきハ蠟燭をなるたけ高き燭臺お立てるとおて左もなくば紙捻の灰から幽靈の正体が見顯されます。又紙捻のィの位置ハ蠟燭の心より低くないやうでなければいけません。

一体の方法ハ右のとほりで其間おハ熟練が必要で、色〳〵注意すべき事も熟練よよりてれのづから得られます。巧よ之を行へば餘程興が有ります。此通り原を探れば詰らぬ物で所謂「化物の正体見たり枯尾花」ぐらゐなものです。

月　評

○東京金閣會　前號にも掲記せし如く仝第七回を去月十一日の紀元節向島小梅村大谷木氏の別邸に於て催されしが、此日ハ折悪しく北風塵を立て行路の困難なりしにも拘はらず來會せし者八十餘名にして常に増して會員互に睦み語らひ遊び戯るゝ様外の見る目もいと樂しげなり。餘興として杉勢、山登、岡野の胡弓、箏、三絃の合奏、荒古董の尺八、及び三遊亭圓遊義士銘々傳の中赤垣源蔵氏が傳記を講談せり後會員一同庭園に出てゝ撮影し終つて各歡を盡し樂み果てゝ後飲會せしハ誰彼

時にてありき仝會も追々會員相互よ金角の交を厚ふし漸く文明交際の摸範を示さんとするは喜ふ可き事なり。

○大日本婦人教育會　仝第二回を去月十八日前會の如く一ッ橋帝國大學の講義室に於て開會せり來會せし會員百五十名に餘り會員小鹿島ふで子の演説及ひ來賓杉亨二氏の講談等ありて終つて本會議事の決議を爲し會員ハ向後其家族及び女子の朋友を同伴するを許す事よなれり。

○東京婦人唱歌會　曩本誌上に掲載せし仝會は去月廿日其發會式を行ひ爾後續き毎週水木金の三日午后三時より九段公園内統計學校よて催し教授は專ら音樂學校研究生木村作子が擔當する由なり。

○育女會　仝第二回ハ去月廿一日例の如く京橋開化亭よ開會せられ來會せしもの百名許りにて會長石川屮子の講談、補助員鵜橋綱太郎、佐田九郎、竹中成憲諸氏の講義等も有りていと盛んなりしと云ふ。

○東京婦人交際會　去月廿日午后五時より例に依り富士見軒に催し會員の會食を行ハれたり。

○東京女工學會　三十間堀に設立したる仝會は獨逸女教師一名、内國男女教師四名を聘して專ら男女洋服裁縫、編物、及英、佛、獨逸の語學を着實懇篤よ教授をる由に聞く。

○音樂演習會　上野公園内ふる音樂學校にては此般教師生徒一致して毎二回同校内に於て音樂演習會を催す事に决し其第一回を本月三日に開會せられたり同校研究生諸氏のピアノ、チルガン、バイオリン諸種の合奏及ひ獨奏、幷に同校生徒の唱歌、管絃樂の合奏等ありて校長伊澤修二氏ば音樂の大家ビートウベン氏の傳記を講述しいと面白しく樂しき會合にてありき。

○私立哲女舘　女子の教育日を追ふて進み月を重れて盛んになり行き都下女子を教育する學校の増加するば誠に喜ぶ可きとなるが今度赤坂區に新設せられし哲女舘ハ其開舘式を本月一日擧行せられいと盛なりし由。

○婦人教會雜誌　この雜誌ハ專ら佛教主義殊に眞宗主義の雜誌にてこの度日本橋區橋町の婦人教會より其第一號を發兌せり島地獸雷氏の見眞大師の實傳を始め多く女子の心得となるべき事項を載せたり。

○花の雪　醫學士竹中成憲氏の處方よして南神保町安川藥舖より此度發賣せし仝藥は皮膚を絹地の目よりも細かくして容色を越路の雪よりも白くし白粉下にハ至極妙なりと云ふ。

○東京女學。芝區櫻田鍛冶町の東京女學ハ昨年七月設立せしに學科の適切と教員の信切等大に世人の意に適ひ現今生徒の數無慮壹百數十名に及ひ昨年末より學舍の狹隘なるが爲め寄宿生に限り入塾を謝絶せしに今度規則を改め學科を増し大に寄宿舍教場等を増設し更に從前申込の生徒を併せ寄宿生五十名増募せらるゝ由、又同學にてハ現今洋服流行の世となり其裁縫教授所も日に増せど大抵ハ皆三五年の長日月を費し僅かに「ミシン」の踏み方、縫ひ方位ゐを敎ゆるのみなるを憂へられ更に熟練なる婦人教師貳名を増聘し裁縫簡易科を設け滿六ヶ月間にて裁ち方縫ひ方「ミシン」等の一通を卒業せしめらるゝよし。

○京都通信　京都婦人慈善會ハ二月四日高等女學校内ニ開キタリ。鴨沂會ハ同十九日同校内ニ開ケリ。京都私立女學校ハ本科七人餘科六人夜學九人寄宿三人ナリ。諏訪たか子氏ノ女子講習會ハ暫ク中止ノ姿ナリシガ近頃再興シ伏見油掛町ニテ毛糸編物、修身、算術、裁縫、作文等ヲ教フル由。高等女學校ハ今度校則ヲ改正シ健全法、看護法等ヲ加ヘ英語ノ時間ヲ増シ、緞繍科ヲ他ヘ移シ三ケ年ノ學期ヲ四ケ年トシ四月一日ヨリ實施スルヨシ現在生徒ハ四百三十九名アリトイヘド尙普通學科三十名和服裁縫科二十名洋服裁縫科二十名ノ生徒ヲ募集セリ。婦人唱歌會ハ一昨年來依然トシテ繼續シタリシガ近頃益入會者ノ増加スルニ至リシハ各小學校ニ於テ唱歌ヲ實施スル一日ニ多キヲ加フルニ原ツクナランカ然レド唱歌會員ニシテ教員免許狀ヲ得タルモノハ未タ一人ニ過キス。京都ハ幼稚園ニ乏シカリシガ此頃二三ノ幼稚園ヲ設立セラレタリ。

附錄の零譜表

5,5,6,5, | 5,5,3,. | 2,2,2,1,2, | 3,3,. | 5,5,6,5, | 5,5,3,. | 2,2,2,3,2, | 1,1,.

1,1,7,6, | 7,6,5,. | 6,6,5,4, | 5,4,3,. | 3,3,4,5, | 6,5,. | 5,5,6,7, | 1,6,.

1,1,7,6, | 5,5,4,3, | 2,0,0,6,0,0, | 5,0,0,4,0,0, | 3,0,0,5,0,0, | 4,0,0,2,0,0,

1,1,3,2, | 1,1,. ‖

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とをお話しいたしましたがさてこれからハ塵埃に付てお話をいたします。砂、埃などハ遠くへ飛び行くもので御存知の通亞フリカにハ佐ハラといふ大沙漠が厶りますがズット海岸を離れて航海する船の帆に砂が結付くさうです。往來稠き市街にてハ車輪の鋼に軋られて石が粉となりて飛び、砂も飛び、馬糞も飛び、随分穢ないものですから毎朝早く掃除して灑ぎ、此埃を飛バせないやうにせねばなりません。此埃ハ目にハ一寸見え兼ねますが日光が戸隙を過ぐるときにハ澤山奔馳て居るのが見えますから大陽の微塵といふ名が付て居ます。此埃ハ高山の頂上も薄くなる位のとで全くなくなりません。又空氣中よハ「バクテリア」といふものが混ッて居ます。「バクテリア」は平たく申せバ活きて居る蟲で、如何なる器でも食物を入れて置ときハ日の經つに從ひ黴が生へますが。是は空氣中の「バクテリア」が食物に結付き玆で生長するからです。此蟲ハ攝氏百度以上の熱に逢へバ死ぬるものですから食物を貯ふるにハ食物を徳利又は瓶の如き栓の付いた器に入れ、之を攝氏百度の熱湯中に逢はした後しつかり栓をすれば蠅帳、戸棚等に何年間藏へ置とも決して黴るとはありません。尤栓もガラスなどの堅いものにも限らず、綿で詰るが最よろしいです。綿はよく「バクテリア」ヲ漉分けますから、此頃肉類の鑵詰が流行いたしますが鑵詰よした肉ハ何時口を開けても腐てゐませぬのは此譯でそ。「バクテリア」は極微少なものですから迚も肉眼で見えません、必す顯微鏡の力を借らなければ見えません。「バクテリア」ハ傳染病の種子で、「コレラ」病の種子となるものもあり、麻疹疱瘡の種子となるものもあります。麻疹と疱瘡ハ一生に一度ハ是非起る病ですから一度も患ハない人が麻疹か疱瘡の患者に接ふときも必す傳染ます。これハ患者の口中或ハ皮膚から多くの「バクテリア」が出ますゟら其空氣を吸込む時ハ其毒が全身にまワッて病氣となるのです、殊に疱瘡を傳染するときハ病死するともあり、左なくも痘痕を留めますから傳染せぬ前よ種痘をせねバなりません。多人數群居る所よは必「バクテリア」が澤山生息つて居ます。閑靜な土地ハ之よ反して「バクテリア」が少い。肺病患者は市中を避けて山地へ引籠るのが良いと云のハ全く之か爲でそ。肺病も矢張蟲から起るものといふことハ日外委くお話し致しました（いらつめ第四號肺病の話参考）。或學者の試驗に據れバ「バクテリア」ゲ八億匹で其目方ハ百万分の二百六十六匁でそ。「バクテリア」はツップの中でも蒸した馬鈴薯の上でもよく育

つ位のものでそから其増殖の劇しい事は明です。極た時刻ふ寒戰したり熱が出たりする間歇熱俗に瘧といふ病も亦「バクテリア」から來るもので此種は排水のわるい溝或は溜池の中で育つものでそ。多人數入込の部屋、即學校の敎場、寄席、芝居抔ふは是非多くの「バクテリア」が空氣の中に混して居まそ。左されバ何故學校の生徒、寄席、芝居の見物人が直と病氣に罹らないかといふ御不審がありましやうが、玆が衛生の肝心なる譯合でそから意を注てお聽きください。衛生學の方から申せバ人間の一生は「バクテリア」との爭に過ぎないので「バクテリア」が人に勝てば人間が死ぬ、人間が「バクテリア」に勝てバ「バクテリア」が死ぬ譯ゆゑ、人間は「バクテリア」に敗けない工夫か第一です。如何すれば敗けないかと申せば身体を健康にさへそれバ「バクテリア」がたとへ襲來るとも爭ふ打敗けて人の体内で打死します。

是より話か變ッて空氣は人の体温よ大切な働をいたすといふとを述べまそ。其前に体温の事から申さなければなりません。人は毎日三度食事をしますが素人考では腹がすくから食るのだと思ひますが醫者の方ではさうでありません。食物は体の働きと熱を供給のでそ。歩行くのも働なら書を讀むのも働、物を考へるのも働あら、脉搏も働です。して此働は何處から來るといふよ食物から來るので、斷食をすれバ忽ち歩くとも讀むとも考へるとも何も出來ません。此働の事ハ尙お話いたすとがありますが是は後に讓り先熱のお話からいたしましやう。壯健な人間の常温は攝氏三十七度でそ。是ハ何地の邊へ參ても此通りで氷の家に栖む北極の人も裸體跣足の赤道直下の人も皆同樣でそ。尤も三十七度と申そは腋下で測た温度で、口中又は肛門の中は是よりは稍高く、心臟は三十九度の高温度でそ即ち外部より内部ほど温度が高うムいまそ。醫者が診察して熱か高い低いと申そは此三十七度を目安とし、之より高ければ熱があるといひ低ければ熱が低いと申そので、手を握り額を撫でゝいゝ加減にいふのではありません。ざから醫者でなくとも寒暖計さへあれば婦人方でも小供衆でも熱を驗すとが出來ます。病氣の外、熱い室や火の側にあれば幾分か温度か上り、又發熱して後惡寒を覺える時は温度か下りますが、其外寒さの爲に凍える時も亦下ります。人間は何位の體温まで堪へ得るといふに最低二十六度、最高四十二度を限りとし之を越えてハ活きて居るとハ出來ません。

体温は前よも申した通り腋下で攝氏三十七度が通常でそが

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

病氣になると段々あがりまして、腋下で四十一度（体内で四十二度位）迄はのぼりますが、之れが人間の最高熱度で四十二度になれバ体内にある養分が凝えて固まりますから身体の機械の働きが總て止り大概は死ます。二十四時間内に一人の体に生ずる熱を醫者が計算しますと、凡一石六升五合計の攝氏零度の水を百度にあげるほどの熱が出來ます。かやうに大層の熱が毎日体中に出來ますから直に眞黒にこげさうな者ですが、造化の工風は實に奇態で、さうならぬやう熱の逃げ道がチヤンと出來てゐます。

空氣は前申す如く（第四頁參照）肺臓へ這入ッて太した働をいたしますが此外に体の熱を逃がしてくれます。夏でも冬でも兩極の人も赤道直下の人も同じ三十七度の体温を保つことの出來るのは空氣の此の働きが其處を旨く加減するからです。

少しも散さずに集めれバ一石六升五合の水を百度にあげることも出來ますが、實際は出來次第なくなる仕掛にしてあるからそんなに集まる憂はありません。然らバいかにして逃るかと云ふに三の逃道があります。第一發熱。第二引導。第三蒸散の三です。

火の傍にゐると暖かいのは火がどん／＼熱をだし、其の出した熱を貰ふから暖かなのですが、人間の体も丁度火と同くどん／＼熱をだして周回にある自分より冷たい空氣などに與へます。之を發熱と申ます。即ち体温は第一發熱で消散してゐます。

引導は發熱に餘程よく似てゐまして身体に觸れてゐる自分より冷い者に熱を與へるので、着物や座蒲團の暖まるのは此譯です。

蒸散と云ふのは目には見えぬが絶えず人間の体から湯氣が出てゐます。此湯氣が体熱を連れ出すのです。

体熱ハ以上の三法で絶えず逃げ去るのですが、其の中でも發熱で一番澤山逃げます。百の物なら五十ハ發熱、二十五ハ引導、二十五ハ蒸散で逃げます。逃げるのハ此三法ですが、逃げる方便を與へるものハ空氣で、空氣がなければ逃げることハ出來ませんバかりでなく同じ空氣でも冷ひのと暖かいのとでハ大變違ます。眞赤に燒た鐵棒を一升の水に入た時と一升の湯に入た時とハ無論水に入た時の方が鐵ハ早く冷くなりますが、これと同じで身体の周圍にある空氣が冷いだけ体温ハ餘計取られます。扇子を使ふと涼いのも日蔭に行て暑を忘れる

のも、水に浴すれバ心持のよいのも皆冷いものに觸れて体溫を早く引導させるからです。

引導でハ空氣が暖なれバ体熱ハ逃げられませんが、空氣ハどんなにあつくても乾いてさへゐれバ蒸散と云ふ逃道から逃げます。暑中ハ空氣が暖で、冬ハ冷いが、体溫ハ三十七度です。その譯ハ皆さん御承知の通り、夏より冬の方が小便の量が多くて汗が少く、つまり汗が多ければ小便ハ少く、小便が多ければ汗が少いのでわかります。夏ハ空氣が暖で体溫を引導するヿが少い代り、汗が出て熱を持ち出しますから小便が少いのですが、空氣が濕てゐてハ蒸散しません。其譯ハ空氣ハ紙も同じで濕てゐるだけ水を吸ふヿが少い故、若し空氣が濕てゐれバ体から出る湯氣を澤山吸ハぬ故蒸氣ハ出るヿハ出來ぬ「蒸氣」が出なければハ熱も逃げられませぬから蒸散するにハ乾いた空氣が必要です。さて人間の皮膚から出る水を計算しました處小便ハ別にて平均一日およそ五合にて此の五合の水がたえず皮膚から出ますから空氣が乾いてゐれバ体熱の逃げ道ハ夏でも充分あります。身体を動せバ熱が多分に出きますから体ハ熱くなりますが血ハ格別あつくなりませぬ。と云ふ譯ハ働けバ汗が出て、熱を連出すから何程働いても体溫ハ三十七度です。

體熱は發熱、引導、蒸散の三法で逃げますが空氣の寒暖乾濕次第で勝手放題に出で行く譯ではありません。一寸手ぢかに例を取て申せバ電信の線のやうな役をする、白い筋の神經と云ふ者が體中に配置つてありまして、空氣が冷くなると皮膚に來てをる神經から本局とも云ふべき人間の一番大切な腦に冷くなッたと注進します。すると本局では直に體の外部にある血管に「縮まれ」と命じて内部の暖かな血が外部にこぬやうにします。又暖かい時は外部の血管、を廣げて内部の血を外部に導き熱を逃します。かやうに重寶な神經があるから、自然と旨く行ッて熱を無駄に取られるヿはありません。自體の爲には冬は熱を失はぬ方、夏は失ふ方がよろしい。して澤山空氣に觸れバ熱はどうしても澤山取られますから、夏は薄衣して胸などあつい〳〵とて廣げます。冬は澤山着物を着て寒い〳〵とて襟をとぢますでしやう。

夏空氣が暖かな爲、又濕てゐるため、體熱が逃げぬときは霍乱になります。炎天に傘も帽子もなくて外を歩けバ太陽の爲に發熱を障けられ倒るヿがあります。霍乱と云は初めは動悸がする、頭痛が初まる、眩暈がする、がッカりする、息苦くなる

そこで體がきのなくなる、そのうちに脈の本元なる心臓が眠る、それ次は地獄へ旅立。霍乱をさけるのは熱を逃がしさへすれはよいのです。

霍乱と丸で反對の物は風邪です。感冒は時候の急に寒くなりたり、寒を我慢したりするとひきますので、一體外部にある血が冷えて血管の縮まると共に內部に這入ますから常に暖であるべき內部の冷えて感冒をひくのです。體の柔弱の人は暖な所から急に寒い所に行くれもいけません。暑中汗をかいて急に裸體になり、體を冷すのは風邪をひくばかりでなく、時候あたりは原因です。時候の變化の最もひどいのは二月と三月です、だから此間は死人の年中で一番多く、寒中をヤット過した病人特に肺病患者は二月の末から三月の內に一番澤山死ます。俗に菜の花の開くとき肺病人は多く死ぬと云ひますが、實事ですから病人は氣をつけなくてはいけません。

空氣は間斷無く動いて居る物ですけれど、其運動が激しくありませんと人間には分りません。凡そ一秒時間に三尺三寸程も運動しませんと其運動を覺る事が出來ません。此空氣の運動を風と申します。往來の風はどんなに遲く吹いて居ましても一秒時間に一丈は流動して居ます。此空氣の運動は誠に緊要の事にて、惡るく汚れた空氣が新鮮のと變り行きます。疾い風になると一秒時間に百六十五尺も奔るものです。則ち大嵐の時です。又風は方角によりて寒暖に差異があります。則ち南風は温く北風は寒う厶います。

空氣は又大變に強く物を壓す力のある物で、水銀を二尺五寸餘の高さ迄も保ッて置く力のあるものです。即ち管に水銀を入れて水銀を盛ッた器へ立てますと、二尺五寸餘も水銀はさかッて參りません。かくも強い壓力を人間が身に覺えませんのは身体中にも空氣があッて甘く平均行からです。此空氣の壓力は地上を去るに從ッて漸々に減ッて參るものです。ですから地上を遠く離れる程呼吸が苦しくなッて參ります。三千尺も地上を離れますと空氣の壓力が餘程減て來ますから呼吸が苦しくつて終には目鼻から血が出ます。我國にて古昔から女子が高山へ登るのをけがれるとか申しまして禁めましたのは至極生理に叶つて居ります。女子は男子よりも易く出血するものです。心臓病にでも罹ッて居る者はかゝる高山へ登るのは至ッて惡るう厶います。九千尺も高さのある山へ人が登ッて何んともありませんのは全く習慣です。中々始めて左樣高い山へ登る事は出來ません。

一つ大切なる事は空氣がよく光線を導く事です。光線は萬物の生育に最緊要の物です若し光線が無ければ萬物は所詮生育する事が出來ません。暗黒な場所ではお玉杓子も蛙と化る事が出來ません。假令出來ても大變に遅うございます。夫れと同じ事で土藏の樣な窓の少ない、暗い處に居るのは健康上大變に害があります。西洋諸國の樣に窓を明けるに困難の場所は大變に青ッぽが多うございます。

發狂の種類に依りまして青の光線のよろしい事もあります。窓の玻璃や壁や其他諸品物はみな青くして狂人の荒れが直る事があります。其外病症によりまして、赤い色や紫の色の光線がいゝ時もあります。空氣の御話は此位にしまして是から土地即ち地面の御話を致しましやう。

地面の低く濕りたる場所は健康上に悪るく、諸病の發生するものです。根岸の樣な井戸を掘ッても手杓で汲める樣な處は健康上大變に悪るうございます。夫れに反して山の手の樣な高臺はよろしうございます。若し岩の上にでも家屋を建てゝ居れば虎列刺病の傳染する事はありません。低き地面にて脚氣、傷寒、虎列刺、瘧抔の病氣が流行ますれば病人の排泄物が土中へ染み込み、又は空氣に混り其病の虫が井戸の水の中へ混り、又は空氣に入り其虫の混りました水又は空氣を知らずに飲み吸ひいたしますから漸々病は傳染して參ります。かゝる病の虫は水氣がありますと易く生長致す物でございます。殊に水の替らぬ池抔の傍に住まうのは甚だ悪るうございます。古昔から土用の中に井戸替や溝渠いぢり抔をするのは悪るいと言ひ傳へますが熱い最中に井戸の土や溝渠泥を陸へ出しますのは大變に害があります。土地は人間の健康に至大の關係を持ッて居りますからよく〳〵居所を選んで住居致しますのが緊要でございます。

土地は人のたんせい次第で大變違ふ物で獨逸なども今こそ立派な盛な國ですが、昔の羅馬人の話によれば、菓物のなる木とては一本もなく、狼などの巣窟であッたさうです。又東京も太田道灌頃迄は御承知の武藏野でありました。又どんな、よき土地でも手入をしなければ荒地になります。だから人の心掛次第でどうでもなるものですが地中には是非悪物があります。水として地に觸てる空氣にうつり、又特に水には混ります。空氣は人間の毎日必要な物ですから土地の人間に大層な關係のあるとも明亮でございます。

第一に土地と空氣との關係を申せば、世間並の人は地中に

は空氣は無いことと思ひますが、大層な勘辨違にて地中にも空氣も澤山あります。地面は砂や土などの細ものから、出來てゐますから是非細かい穴があいてゐます。穴さへあれば空氣は何處にも這入りますから地中にも澤山ある筈です。一寸見た處では空氣のありさうもない石の中にもありまして花崗石ですらあります。これで地中に空氣のあることは御解りになりましたらうが、どの位あるのと調て見ると、百立方尺の土の中にも平均六十四立方尺は空氣です。地中の空氣は地上の空氣とは大變違ひて炭酸の御話の時申た通地中には炭酸が澤山ある故地中の空氣には炭酸が是非澤山ありまして。地上の空氣には人間に大切な酸素が二十一ありますが、地中には十五しかありません。その代に毒な炭酸が澤山ありますから地中の空氣は人間には毒です。尤も地中に何處にも同じ様にあるのではなく、下に行くほど澤山ありまして、深い井戸で人が死ぬのも此譯です。地中の空氣は地上の空氣と斷ず交通して、下から上に出、上から下に這入ります。其出入の源因は色々ありますが、第一風の吹いた跡の空氣は吸ふ力がありますから、地中の空氣を吸ひ出します。また暖なときも空氣が稀薄なり壓力が減りますから、地中の空氣はヅッ〳〵出て來ます。又空氣が冷へると空氣か濃くなり、壓力が増しますから、地上の空氣は地中に推込まれます。風はよく吹くもの、寒暖は毎日あることですから上下の空氣は始終交通します。が冬は寒い故夏よりはどうしても地中の空氣のでることは少うございます、けれども暖爐をたきますと室か大層暖かになりますので地中の空氣は床を通ッて這入りますからストーブも善し惡しです。また雨が降りますと、降た雨は皆な地中には這入らず、太陽の熱に蒸されて大概半分天に歸り、殘る半分は地中に浸み込みます。尤も夏は地面も空氣も暖ですから半分の餘天に登り、冬は冷えてゐますから半分餘地中に入ります。水が地中に這入るから中の空氣は行處がありませんゆゑ外に出ます。これも地中の空氣が外に出る一大源因であります。

是から水と土地との關係を述べましやう。地面を堀ればどこでも水がありますが、其水の表面と同じ水平に何處でも其近所には水があります。地水即ち地の下にある水は人体と大層な關係を有ち、脚氣、間歇熱、虎列剌等の源因は重に地水の作用から來ます。地水は川の水の如く流れてゐて、二十四時間内には一丈位横へ動きます。横に動く外に斷えず上下に動きます。御覽なさい、井戸の水は始終同じでなく不斷増減

してゐます。横の運動は左までゝありませんが増減即ち上下の運動が人間に大關係を持てゐます。如何にして地水が増減するかと云ふに雨が降れバ増し、旱すれは減ります。雨が降れバ雨水は地水のある所迄地面をくゞッてしみ込みますから、水ハ増します。尤雨が遠方で降ッても水ハ傳り來て井戸の水の増すことがあります。さて地水が増せバ地ハ濕り、地水が減れバ地ハ乾くとハ誰方も御承知でしやうがこの濕たり乾きたりすることが人間に大關係を持てゐるのです。

大概の物は水の中にあれバあまり腐朽ません。又家の柱などの樣に乾いた空氣中にある物も中々腐朽りませぬが或る時ハ水に入り或時ハ水の外に出て乾いたり濕たりする所が早く朽ちます。橋杙も始終水に浸つてゐる所ハ容易にくさりませぬが、乾濕常なき水面の所ハ早く朽ちて細くなります。電信柱も空氣中にある所と地中にある處との堺目が最も早く朽ち上下は中々朽ちません。度々申す通地面の中にハ色々な物が土に混てありますが、この色々の物が水の上下する爲め腐敗ります。橋杙と同じ道理で始終水中にあれバ腐りませんが、水の上下する爲め、乾いたり濕ッたりするので其の堺目にある物がくさります。井戸の水の澤山あるとき、即ち地水の澤山あるときも地中にある悪い物も腐敗りませぬが井戸の水が減るとき腐敗り初めます。抑も物の腐敗るのも毎度申上るバクテリヤと云ふ細小な虫がくさらせるので物の腐敗ると腐敗らぬとも全く此の虫のあるとなしとによります。此虫の勢力を逞しうする時も物が乾いたるにもあらず濕りたるにもあらず良加減のときです。バクテリヤが地中に特に多いと云ふとも又地水の上下するとき、盛に繁殖するとも又人間の生涯ハバクテリヤとの戰爭だと云ふとも明に分てゐますから地水の増減も人間にとりても實に恐しいのです。バクテリヤの一番澤山繁殖する時も旱がして、地が乾いた時雨が降ッて地が濕て再び乾く時ですから井などに水が澤山ありますときハあまり流行病ハありませぬが夏雨が少く、旱が續いて水の涸れたとき、コレラが流行します。倘一層盛なるときハ雨が降たり止だりするとき一番盛です。地水の上下より最も盛に起る流行病はコレラと腸チブスです。けれども地面を堀ても下が岩で水の出ぬ處はコレラは繁殖するとは出來ません。總てバクテリヤを減らすには謝水をよくするが何より肝心です。間歇熱も土地の濕より起る者にて濕地に多くして乾きたる地か、水一杯ある地ならバ至て少い者です、と云ふのは腐らぬから病の種が

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

兆民居士中江篤介先生題辭
横山峰一先生譯述
波斯奇談
奇遇夢物語
洋裝美本美書挿入定價金三十錢郵稅十錢特別割引三十五錢
見本と雖も代金を要す

本書は十八世紀政海の情波を暗よ評し泰西ゐて有名の獨逸千一夜物語の内を譯述したる者にて原書い歐米諸國讀まさる者殆んと稀なるは其情を説破し得たるの証なり加之譯者の苦心増訂し以て一層の爽快を増し讀者一たび繙けバ再ひ閉る能はざるの感あらしむ乞ふ江湖の諸士一本を購ひ其妙味を採られん事を

東京本郷區元富士町二番地
發兌書林 盛春堂

雅友叢誌
毎月十五日發行
上等白紙摺美本
定價壹部前金五錢十部全四拾五錢
郵稅壹錢郵券代用壹割增但壹錢券

本誌記載ノ種目ハ○和歌○狂歌○正詩○狂詩○發句○情歌○川柳○新題考物等ニテ毎號美書ヲ插入シ雅致ト粹ト意氣ト滑稽トヲ集メタル好雜誌ナレハ全國ノ雅客粹士ヨ乞フ一讀シテ其妙味ヲ知リ給ヘ但會員ニハ壹部四錢ヲ以テ須ツ會則ヲ望マル諸彥ハ郵券二錢ヲ投セヨ

日本雅人懇親會事務所
大阪東區瓦町四丁目四十六番地
雅友叢誌社

教學論集
第五拾壹編
三月五日發行
價郵稅共九錢

目次●五拾編發行、祝詩（南條文雄）同（石村貞一）祝文（大内青巒）●佛敎眞理（島地默雷）○看病福田說（福田行誡）○明治諸宗綱要（吉谷覺壽）○興產の急務第六（干河岸貫一）●雜錄○硯

記○送南條碩果經印度還日本（萱了法）○祝五十編發行（佐治實然）●詩歌十八首○哲言●勅宣大師號表●衆因緣の好例●蝦夷人の樂器唱歌●地球の重量●有情の樹木●片足の出入●世諺故事●僧侶の餘業に醫を兼るの說●六冊前金郵稅共五十錢○十二冊同九十錢（毎月一回發）

發行所
東京芝公園廿六號
無外書房

文學士天野爲之君序 經國學人中山整爾著
社會改良 女子教育新論
正價金卅錢
郵稅拾錢

婦人改良の必要なる今更余輩の呶々する限りに在らす共現狀の悲しむ可く痛むへきも亦明言をるを俟たさるなり蓋し世上の識者此に見るあり近來婦人改良女子教育の說を主唱するもの日一日に多きを加へ此一問題ハ實に日本の今日に最も喧しき姿となれり茲に經國中山整爾君の著述に係る本書ハ則ち此の急要なる婦人改良を極論したるものにして章を憰利職務交際家政教育等の諸種に分ち女子教育の方針を論述したるものなり實に目下肝要の著書と謂ふ可し今般刻成る諸士幸ひに一讀して此急要なる問題の歸着する所を判せよ

賣捌
神田區西福田町一番地
誠之堂
柳原喜兵衛
大阪心齋橋北久太郎町
外各書林

全也本基的美善之榮繁盛昌 族家
社會改良進步之好妙的方法也
女子教育論
白耳義 ポーリユー氏 著
日本 保野時中氏 譯

本書ハ名聲ヲ萬國ニ博セシポ氏ノ著論ニシテ上下二篇通計七章ニ分チ且追加トシテ近世ノ碩學パスチヤ、トクウサール、ジユールシモン、エミールドラブレー等諸氏教育ノ論議ヲ抄錄シ最着實ニシテ最社會ニ必要ナルモノナリ○正價四十錢郵稅十六錢

東京府牛込通寺町二十九番地
政典集誌社

遞信省認可

毎月一回發行　第一號三月一日發行

西洋叢談

一冊十錢郵税一錢
五冊前金半圓○見
本一冊郵劵十二錢

第壹號目錄○西洋叢談發刊之主意○英國書生ノ狀態（繪入）○矮小人種○戲劇中ノ眞劇○婚宴縱覽○保險會社ノ謝絶○希臘古代ノ寓諺○二人ノ僞聾者○髯ノ賣買（繪入）○藥舖外ノ藥○身自ラ國王乎否乎ヲ知ラズ○佛帝言行叢話○サウ安クハウランクリン○二葉ヨリ○孰ガ姉乎（繪入）○王ノ意外○亞刺丁物語一名怪シノランプ第一回（繪入）○著書家ノ苦獄○日本デナラバ宮武外骨○醫者ハ醫者デモ藥箱持タヌ○最後ニ最後○手眞似問答（繪入）○將軍ノ滑稽○俳優奇聞○狀師ノ狡猾○炒豆ニ花咲ク○哲學者ノ嘲罵（繪入）○浮世ハ色氣○伍長ノ高慢（繪入）○詭計廣告○印度人ノ機轉

發行所　東京府神田區駿河臺北甲賀町三番地　頓知協會

藥舖開業御披露

一場所は南神保町四番地九尺二間の小店に御坐候間御急用の節御通り越し被下間敷候樣願上候○屋號は翁屋年波のよるひるとなく家業を勵み品物は可成安川政二郎儀番頭忠兵衛丁稚長松をも兼勤仕り曹達半錢の御客さまたりとも麁略の御取扱不仕候○諸先生の調劑仕候そも〳〵是は貴重なる人命に關係仕候ものゆゑ御來客の節は花の朝雪の夜は不及申晡を吐き髮を握り主人みづから麁忽なきやう調劑仕べく候○藥品は和漢洋とも御坐候○賣藥類は金看板に僞なく正銘の品さし上可申候○食料紅染草ろい色々御坐候○灰爐線香より木賊菊面石類に至るまで有之候間隨分御重寶がり被下度候○香水香油仕入候間廉價にて良品を差上申候白粉白粉下石鹼齒磨等格別吟味仕候間掃溜に鶴なり〳〵貴婦人紳士の御來車願上候○花の雲と申候白粉下は醫學士竹中成憲先生の御處方にして私店本舖に御坐候一瓶御試の上御客樣の口よりたゞ一言御賞美被下候得ば數十行の能書にも出優り候ゆゑ葛根湯は手前ものなりさりも妄りに昼に風引かせ不申候○九層倍の利益は藥舖の通則と申傳へ候得共私方にては四層倍半にてあきなひ仕候○開店の當日十錢以上の御客さまへは翼なくして翔り足なくして飛ぶ新奇妙案の景物呈上仕候

開業日追而御披露申候

藥舖　神田區南神保町四番地　安川政次郎白

醫學士竹中成憲著
改訂增補 **肺病養生法**　定價金四錢郵税共金六錢一錢切手代用不苦施本等ノ為十冊以上御購求ナレハ特別ノ御相談可申府下ハ各雜誌屋繪草紙屋ニ就テ御購求被下度シ

此書ハ恐るべき肺病を未然に防ぐことを親切に說きたるものにて之を衣服、呼吸器、入湯、飲物、食物、煙草、運動、寢床、談話、勉強、職業、藥、温泉の十三門に分ち極めて平易に極めて親切に說きたれハ一本を携へなバ益すると尠からざるべし殊に廉價なれは慈善家により施本として頒つに最も便なり

取次所　本鄉湯島天神町一丁目五十九番地　成美社

社告

○ひらつめ代價　一册金八錢　六册（半年分）金四十五錢十二册（壹ケ年分）金八十錢府外毎號郵税一錢宛申受○毎月第二土曜日發兌

雜誌代ハ前金ニ付御注文ヲ受クルモ金子到着セザレハ配達セズ金子盡クレハ配達ヲ止ム依テ金子ノ切レサル樣前以テ御差出ヲ乞フ金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラバ拂渡郵便局ト御記入ノ事弁ニ受取人氏名トアル所ニ本鄉郵便局トアル所ニ本鄉湯島天神町壹丁目五十九番地成美社ト御記入ノ事○郵便切手ニテ御差送リナラハ一錢切手一割增ニテ御差送リノ事二錢以上ノ切手ハ御斷

○廣告料一行（五號文字二十七字詰）金五錢○十一行以上金四錢五厘○二十一行以上金四錢
但前金ニアラザレバ載セズ

發行人兼印刷人　武田安之助
編輯人　正木政吉
主幹　新保磐次
發行所　成美社　東京本鄉區湯島天神町壹丁目五拾九番地

（築地活版製造所印刷部刷行）